
六つの聖獣を司る I Sを偶然使えてしまった僕

kanchira

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

六つの聖獣を司るISを偶然使えてしまった僕

【Nコード】

N7704X

【作者名】

kanchira

【あらすじ】

主人公、天野^{あまの}翔^{かける}は女性ですら起動できない特殊なIS
‘‘電童’’を起動させてしまい、IS学園に入学する事になってしまった。

彼は11歳の普通の小学生であり、普通でないISを起動させた以外に特別な事は何一つ無い。

果たして一夏を中心に起こる事件に、翔はどう対応していくのか…？
ネタがダブってるのを覚悟でやりました、問題があれば削除します。作者の暇つぶしで考えたネタです。暇な時に作ったりして

るのでそんなに期待しないでください。

プロローグ

僕の名前は天野^{あまの}翔^{かける}。理由があってIS学園って学校に入学する事になった。

両親は僕を生んだ後に他界してしまったらしく、孤児院で育っていた。

その件に関して僕は不幸だとは思っていないし、むしろ沢山の友達と兄弟姉妹がいて、

とても楽しいものだったし、両親と呼べる人物もいた。

：話がそれたけれども、これから通うIS学園は高校で、僕はまだ11歳。

なのに僕は中学校を抜かしてクラスメートの皆より先に高校生活をするハメになってしまった。

普通なら頭がいい子供とかは小学生でも普通に大学に通ったりするのだけれども：

生憎だが、僕にそんな天才的な頭脳は持ち合わせていなかった。

どうしてこんなことになってしまったのか……

あの時、僕の親友と一緒に、遊園地へ遊びに行った時だった。

親友が何を思ったのか、関係者以外立ち入り禁止のドアを開け、中へ入ってしまった。

僕は親友を止めようとして一緒に付いていった。

僕の言葉には耳を貸さない親友に少し腹が立ったけれど、昔からこういう奴だった事を思い出す。

そして、どんどん奥へ進んでいくと、ISの研究所があった。

ISっていうのは、僕が聞いた話だと、元々は宇宙で活動する為に創られたモノだった。

けれどもある事件によって、その存在は――兵器――へと変わって言った。

ISはかなり強力で、IS以外の武器ではまるで歯がたたないらしく、

世界のばわーばらんすつていうのが崩壊したらしい。

しかも女性しか起動できないようで、じょそんだんぴ社会になっちゃったらしい。

：話を戻すと、僕たちはISを見つけた、親友はそれに近づいて触ったけど、何の反応も無い、

僕もそのISに触ってみると：頭に金属音が響くのと同時に、――IS――の情報が頭に流れ込む。

その一瞬で、ISについて分からないことは無いんじゃないか？って思ったくらいだ。

そして気がつけば、ISは僕の体に纏わりついていた。

響くアラート音、室内は赤く光だし、侵入者が訪れた事を知らせた。親友は真っ先に逃げ出し、僕も逃げようとしたけれど、

ここを警備しているISと思われる人に取り押さえられてしまった

……

ここから先は悲惨な一語、なんて事は無くて……

どうやら僕が起動させたISは特殊らしく、女性にも反応しなかったらしい。

それに僕は男だって事で、色々な検査をされたりした。

そして僕の事は世界で――二番目に――男性でISを起動させたとして世界に放送された。

その後は高校だがIS学園に入学するのが安全だと尋ねてきたIS学園の先生と母に言われ、

そのままIS学園に入学する事が決定してしまった……

これから僕はどんな学園生活が待っているのか……

正直、事件なんかと関わらずに平穏な学園生活を送りたい……

でも、そんな願望は簡単に打ち碎かれることになった。



「…と、翔くんの話はこんなモノかな？」

私は先程までこのI S学園に転校してきた二人目の男性で小学生である天野翔が

このI S学園に入学するまでの経路を日記に書いていた。

ほとんど翔君の事で日記は埋まってしまう自分の事を書けなかったが……

まあ、別にいいだろう。後はこれを本人に見せてみてどう反応するか…

とっても楽しみだ。でも今日は遅いから明日にでもこの文章を見せてみよう。

翔君は弄ってやると可愛い反応をするから、どんなリアクションを起こしてくれるのか、

とっても楽しみだ。大切な事だから二回言おう。

さてと…やる事はやったし、今日はもう寝ることにしよう……

キャラ紹介ー主人公編

主人公…天野 翔 あまのかける

年齢…11歳

性別…男性

容姿…黒髪で幼い顔立ちで、女性に間違われることもある

黒くピヨコンとしたアホ毛が生えている。そこは敏感な部分で触れられるのを嫌がる。

身長も小さめであり、小学校でも身長で並ぶときは前側になってしまう。

参考…両親は幼い時に事故で他界し、孤児で孤児院に引き取られ育った少年。

自分から何かを言い出したりはしない内気な性格だが、周囲から虐められた事は無い。

むしろ老若男女に好かれているが、カッコいいと言われないのがが悩み。

休日に親友と遊園地遊びに行くが、親友は入ってはいけない場所まで行ってしまう。

親友を追いかけると地下にISの研究所があり、ISに触れると起動してしまう。

翔が起動させたISは普通の女性でも起動させることができず、

失敗作として廃棄されようとした所を翔により起動される。

そのISはそのまま彼の専用機となり、飛び級でIS学園に入学したが、

頭脳は普通の小学生と同様で、授業についていけないし、ISの点検もできない。

同じ立場にいる一夏の事を「一夏兄ちゃん」と呼び、慕っている。

専用IS…電童

生きる武器と進化するパイロットを目標とされ、製作された

IS

巨大な両腕と両足に「ハイパープラズマドライブ」と呼ばれるタービンが特徴。

それ以外は何も装備されておらず、シンプルなデザイン。

ハイパープラズマドライブを回転させる事で敵に強力なダメージを与えるが、

本当の使い方はデータウエポンと呼ばれる装備を装着した上でその真価が発揮される。

このISの最大の特徴で専用の武器となるデータウエポンだが、

最初っから全ての武装が使用できる状態ではなく、

電童の使用者の精神の向上により、その封印を開放する事で使用可能となる。

ISの待機状態は歯車の形をしたロケット、rocketでありrocketでは無い。

中身を開くと謎の写真が存在しているが、翔は開けられる事に気がついていない。

キャラ紹介―主人公編（後書き）

ちなみにデータウェポンですが、何故七つではなく六つなのかという理由は、

感想に既に書かれているので、そこを参照してくれると嬉しいですよ。そしてその発動条件ですが、四体は原作と同じです。原作は契約対象ですけど…

一番空気がったデータウェポンの使用条件が変わっています。

ちなみに一番武器として使用されたのも条件を変えようか迷っています…

想像力とはどう生かせばいいのか、考え中です。

第一話 クラスメイトはほぼ全員お姉さん

「全員揃ってますねー。それじゃあSHR始めますよー」

黒板の前でおっとりとした声で言う。名前は山田^{やまだ} 真耶^{まや}って先生だ。先生って言うより周りの皆と同じくらいと言われても疑われないと思う。

周りを見渡してもその顔は女子……しかも年上のお姉ちゃんばかりだ……

僕の席は最前列の一番右側で、との二つ隣が僕と同じ男でISが使えるって言うお兄ちゃんだ。

名前はまだわからないけど、これから仲良くなれたらいいなあ……。

「はい、それじゃあ出席番号順で……一番最初に天野翔くん。自己紹介お願いします。」

「は、はいい！」

僕は情けない声をあげて、先生の声に反応して席を立つ。

くるり、と教室全体を見渡せれるように体の向きを変える。

やっぱり、クラス中の視線が僕に集まってくる、お兄さんを見ると……何か考えているのか、

僕の方向をみずに、ボケーっと視線を泳がせている。

……僕はなんだか動物園にいるパンダと違って、こんな気持ちなんだろうなあ……って思った。

「あ、天野翔って……います！その………」

自己紹介するにも、次の言葉が出てこない。

「……ボクは皆さんと年は違いますが、一生懸命頑張りますので、よろしく願います…」

…これがボクの言える精一杯の自己紹介だ。
後半部分はかなりの小声で喋ってしまった。

幸いにも、ほとんどの人が拍手をしてくれたのが嬉しかった。

ボクは席へ座り、先生は次の人の名前を言う。

……そしてボクと同じ男の子の自己紹介の番…なんだけれども、
先生が名前を呼んでもすぐに反応しないで、ボーッとしていた、大丈夫なのかな？

先生が大声で名前を呼んだ後、裏返った声でお兄ちゃんは返事をした。

その反応に弱気になって謝り続ける先生、その気持ちはよくわかる……

もしかして、相手を不快にさせちゃったりしていないかな？って常にボクは思っているし、

無視なんてされたらそれこそそんな風に思っちゃうなあ……

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしく願います。」

…まさか、これだけなんだろうか？

「……………」

一夏の兄ちゃんはこれ以上何も喋らなかった。

「以上です」

がたたつと一部の女の子がずっこける、ボクの後ろの女の子もずっこけた。

先生もちよつと涙が出そうになっている。

：すると、一夏の兄ちゃんの後ろから、一夏の兄ちゃんそっくりのお姉さんが現れて。

バアンッ！と、何かで頭を叩いた音が教室に響いた。

叩いたお姉さんの顔を見て、一夏の兄ちゃんは何をトチ狂ったのか。

「げえっ、関羽！？」

少なくとも、お姉さんに対して言っではいけない言葉だとはわかった。

それよりも、関羽って一体何？歴史上の人物か何かかな？

この現れたお姉さんは、織斑先生と言って、このクラスの担任なんだって。

そういえば僕がISを起動させた時に孤児院に来てた先生はこの人だったような気がする。

先生の正体を知った女の子達はキャーッと喜んで織斑先生が担任だって事を喜んだ。

：その理由はよくわからないけれどもここにいる一夏の兄ちゃんのお姉ちゃんって事が分かった。



：一時間目から、授業の内容が一切理解できなかった。

孤児院に来た時に織斑先生は授業の内容が理解できないのは仕方が無い、とは言ってたけど：

魔法の呪文のように意味不明の単語を連発して、何がなんだか分か

らなかった。

少しくらいならわかると思ったのに……

ハア、と少しため息をして席を立つ、同じ男として織斑一夏の兄ちゃんに話しかけようとした。

けれども一夏の兄ちゃんは知らない人と廊下に出て行って、話しかけることが出来なかった。

そのままボクは自分の席へ座ろうとすると、突然目の前に二人の女の子がボクに話しかけてきた。

「ねえねえ」

「は、はいっ」

ボクは少し緊張して話しかけてきた顔を見る、一人は黒髪だけど全く知らない人で、

もう一人は緑色の髪の毛をしていて、どこかで見たことのある人物だった。

「翔くん、私の事覚えてる？」

黒髪のお姉ちゃんはボクに質問してくる、ひょっとしてどこかで出会っていたのかな？

「い、いえ…覚えてないです……」

ボクは今にも消えそうな声で答える。

「えーっ！覚えてないのー！？私、吉良国きらぐに 早苗さなえって名前なんだけど…

翔君と一緒に孤児院出身で、よく一緒に遊んでたでしょ？まさか

覚えてないとは言わないよね？

ホントの本当に覚えてないの？名前聞いて思い出さない？ハッ！まさか記憶喪失…！？」

勝手に一人で盛り上がってるけど、知らないったら本当に知らない。暴走している早苗さんを止めたのは、もう一人の緑の髪のお姉さんだった。

「こらこら、翔君が困ってるでしょ？ごめんね、この子、暴走しやすく…」

あ、私の名前は草薙^{くさなぎ}織香^{おりか}って言います。

翔^{おりこ}くんの幼馴染の織子ちゃんのお姉ちゃんです、私の事覚えていますか？」

もう一人の緑のお姉さんはとてもゆっくりとしていた。

どうやら子供の頃に一緒だった織子のお姉ちゃんみたいだ。

……結局、覚えていんだけどね。

「あらあら、その反応だと私も覚えていないようね」

「う、ごめん…なさい……」

ボクは二人に謝る。

「いいのよ、気にしないでね」

「うん！それよりISで分からない事があったら私たちに言ってね！点検とか勉強とか色々とおねーさん達が教えてあげるから！」

学校のチャイムが鳴り、二人は自分の席へ戻っていく。

その場所を見ると、一夏の兄ちゃんの後ろが早苗さんで、その後ろが織香さんだった。

：以外のあの席の辺りにはお世話になるかもしれない、と思った。

第二話 授業が分からずごめんなさい

「――であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、

枠内を逸脱したISを運用した場合は、刑法によって罰せられ――」

山田先生はすらすらと教科書の内容を読んでいく。

けいほうとかこっかのにんしょうとか、言っていることがよくわからない。

……ボクがISを使えるからと言っても、いくらなんでも高校は早すぎると思うんだ。

果たしてボクはIS学園を無事に卒業できるのだろうか？

今更になって、ボクは将来に対して不安を感じるようになった。

「織斑くん、何かわからないことがありますか？」

山田先生は一夏の兄ちゃんに質問している。

一夏の兄ちゃんは何やらごによごによと何かを言っている。

「わからないところがあつたら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

山田先生はえっへんと言いついそうな感じになっている。

ここで一夏の兄ちゃんはトンでもない爆弾を投下した。

「先生！ほとんど全部わかりません！」

…本当に高校生なんだろうか？

確かに、ボクもほとんどどころか、全部分からないけど……

「え……ぜ、全部、ですか……？」

山田先生は先ほどまで頼れそうな雰囲気を出していたけれど、今はそんな雰囲気は無く、また泣きそうな表情をしている。

「え、えっと……織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はいますか？」

……ボクは黙って手を挙げる。

横にいるお姉さんがボクが手を挙げたのに気づいて次々とボクの腕に視線が集中してる

……気がしてならない、嫌な冷や汗が沢山でる、もう帰りたい……一夏の兄ちゃんはなんだか世界で自分が一人になったと思ったら、もう一人人間がいて人間の温もりを感じている、って顔をしているかもしれない。

でも、ボクは本来なら中学生になる所だったんだよ？

「…織斑、入学前の参考書は読んだか？」

教室の端っこで授業の様子を見ていた織斑先生が一夏の兄ちゃんの前へ立った。

「古い電話帳と思って捨てました」

バアンツ！ 織斑先生は手に持っていた黒いので一夏の兄ちゃんの頭を思いっきり殴る。

「必読と書いてあったろうが、馬鹿者。」

あとで再発行してやるから一週間以内に全部覚えろ。いいな？」

「い、いや、一週間以内であの分厚さはちょっと……」

「やれと言っている」

「……はい。やります」

一夏の兄ちゃんは最後に織斑先生の眼光に負けちゃったみたいに見える。

…そして織斑先生が僕の前に来た。

「天野、まさかお前まで捨てたなんて言わないよな？」

鋭い眼光に、ボクは泣きそうになる。

「……捨ててません…中身は、ちょっとしか覚えられませんでした……」

かなり小声で先生に言った、正直聞こえてほしくないと思っているけど、

織斑先生は声が小さいって理由で頭を叩きそうだった。

ボクはすかさず目を閉じ、両手を頭の防御に使った…けれども叩かれることは無かった。

目を開けて織斑先生を見してみる、すると呆れた様子でこう言った。

「私はお前が重要な資料を捨てる馬鹿者かどうか知りたかったただけだ」

と言って織斑先生はボクに言った。

「天野は特別な事情があつてこの年齢でIS学園に入学した。だがこれだけは覚えておけ。ISはその機動性、攻撃力、制圧力と、

過去の兵器を遥かに凌ぐ。そういった『兵器』を深く知らずに扱えば

必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。

理解ができなくても覚えろ。そして守れ。

お前がこの学園に入学している以上、この学校の規則には従ってもらおう」

「は、はい……」

織斑先生に圧倒されながらも、その言葉にはどこか優しさがあったかもしれない。

「……」

一夏の兄ちゃんはそれを黙って聞いている。

「え、えっと。織斑くん到天野くん。わからないところは授業が終わってから

放課後に教えてあげますから、頑張つて？ね？ねっ？」

山田先生は涙目になりそうで、ボクと一夏の兄ちゃんにそう言った。

「はい。それじゃあ、また放課後によろしくお願いします」

「あっ…ぼ、ボクも放課後に…お願いします」

ボクは席を立ててペコリとお辞儀をした。
山田先生もボクの行動に続いてお辞儀をした。
織斑先生も教室の端っこへ移動していった。



二時間目の授業が終わり、ボクは一夏の兄ちゃんに接触しようとしてみた。
同じ男同士だし、そしてなにより一体どんな人なのか、ボクはそれが知りたかった。
一夏の兄ちゃんはさっきの授業で疲れたのか、机の上でぐったりとしている。

「……あの」

消えそうな声でボクは一夏の兄ちゃんに話しかける。
一夏の兄ちゃんはその言葉に気づいたのか、僕に視線を…向けなかった。
ボクの身長が小さすぎて、髪の毛の先っちょしか一夏の兄ちゃんの目線は見えていなかった。
一夏の兄ちゃんは目線を下に向けて、やっとボク存在を確認できたようだ。

「もしかしくなくても、もう一人の男性ISを起動させたって言う…
…?」

「は、はい！天野翔って言います。よろしくお願いします…」

「ああ、よろしく。俺は織斑一夏、一夏って呼んでくれ」

「えっと…じゃあ、一夏兄ちゃん…って、呼んで…いい？」

孤児院にいた時はよく年上に対して兄ちゃんや姉ちゃんと呼んでいたから、

ボクにとっては兄ちゃんと呼んだほうがとっても呼びやすかった。

「おう！放課後は一緒に頑張ろうぜ！」

一夏兄ちゃんはすっと右手を差し出してきた。

ボクはその手を右手でグッと握った、用は握手である。

このリアクションで一部の女の子から歓声が上がったけど…男の友情が珍しいのかな？

とにかく、ボクは一夏兄ちゃんと友達(?)になった、瞬間から…

「ちょっと、よろしくて？」

僕たちの間を割り込むかのように話しかけてきた人がいた。

…これが理由で、ボクは後で大変な事に巻き込まれてしまうなんて

……

第三話 決闘騒ぎにボクを巻き込まないでください

「ちょっと、よろしくて？」

僕たちは突然知らない誰かに声をかけられた。

男性はボクと一夏兄ちゃんの二人だけだし：誰だろう？

相手は金髪が綺麗なお姉さんで、瞳の色も青かったし、多分アメリカ辺りの人なんだろう。

でも、それ以上に漂うお嬢様って雰囲気なんだかボクにとって不安を感じるようになった。

「俺達に何か用か？」

一夏兄ちゃんはこのお嬢様に言った。

けれども、返ってきた返事は失礼なモノだった。

それから一夏兄ちゃんとお嬢様、名前をセシリア・オルコットって言わらしい。

一夏兄ちゃんはセシリアさんに対してかなりボケて、セシリアさんはかなり怒っていた。

それにしても、ボクは初めて外国人に日本語を突っ込まれる日本人を見たよ……

チャイムが鳴ってぶんぶんという擬音じゃ済まされない怒りを露にして席に戻っていった。

その後、普通に三時間目の授業が始まると思ったけれども、ちょっと違った。

織斑先生が教壇に立ち、代表を決める、と思い出したかのように言っていた。

…重要そうな事なのに、忘れてちゃって大丈夫なんだろうか？

「クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席…まあクラス長だな」

つまり、織斑先生の言ったとおりにクラス長を決めるようだ。

一年は変更できないらしいし、ボクがなったら大変そうだなあ…と、他人事のように感じた。

「はいっ。織斑君を推薦します！」

一人のお姉さんが一夏兄ちゃんを推薦する。

その人が言った後は次々と一夏兄ちゃんを推薦する声があがっていく。

「はい！私は天野くんを推薦します！」

「私も天野くんを推薦します」

一夏兄ちゃんの後ろ、早苗お姉ちゃんと織香お姉さんがボクを推薦してくる。

……なんで？もしかして面白半分じゃないよね？

それから一夏兄ちゃんを推薦していない女子がボクの事を推薦してくる。

正直、勘弁してほしいなあ…

「織斑と天野以外、誰もいないのか？いないなら…」

「ちよっ、ちよっと待った！俺はそんなのやらな——」

「待ってください！納得がいきませんわ！」

織斑先生の言葉を遮って言った一夏兄ちゃんの言葉を無視して喋るセシリアさん。

「このような選出は認められません！大体、男がクラス代表になるなんて――」

セシリアさんは偏見すぎる発言をしている。大丈夫なんだろうか？ここ日本だよな？

暴走したセシリアさんに対して一夏兄ちゃんは怒って、決闘する事になった。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコット、天野はそれぞれ用意をしておくように」

……あれ？なんでボクも入っているの？

「なんで自分が入っているんだ、と言いたそうだな？天野。

これはクラス長を決定する戦いだ。推薦された以上はお前も参加する必要がある。

それでは、授業を始める」

このまま織斑先生は授業を始めた。

……と、言うかなんで言葉に出してないのに思った事が分かったんだろう……？

以外と読心能力とかあったりして……



放課後、ボクは織香お姉さんに勉強を教えてもらっていた。
その内容は分かりやすい方だったけれども、ほんの少ししか理解できなかった。

ISは元々は宇宙開発用だったとか、だから性能が凄いつて事は分かった。

一夏兄ちゃんは山田先生と一緒に勉強していたけど、何が何やらと言った表情をしてる。

今はもう大体は教えてもらった後で、山田先生も織香お姉さんも教室から出て行った。

「うう……意味が分からん……。何でこんなにややこしいんだ……？」

一夏兄ちゃんは勉強が全く分からなかったらしい、ボクもだけど……

「ね、ねえ……一夏兄ちゃん？」

「……どうした。翔？」

「ホントにこんなんでセシリアさんに勝てるのかなあ……？」

ボクは正直勝てるとは思わない……

実力はどうか知らないけど、唯一入試で教官を倒したって言うてるし……

ボクは倒せなかった。それどころか浮くことも移動する事もマトモにできなかった。

……なぜか一夏兄ちゃんは倒していたらしいけれども……

弱気なボクの反応に対して一夏兄ちゃんは強気だった。

「とにかく、やれる所までやってやるさ」

一夏兄ちゃんには自信？みたいなのがあった。
とにかく足掻けるだけ足掻いてみましょう、って感じだ。

「ああ、織斑くん到天野くん。まだ教室にいたんですね。よかったです。」

教室に山田先生が入って僕たちに話しかけてくる。

「二人の寮の部屋が決定しました」

山田先生はボクと一夏兄ちゃんに番号が書かれた鍵を渡してきた。

「俺の部屋、決まってるじゃないじゃなかったですか？

前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらって話でしただけど？」

「ぼ、ボクもそんな感じでしたけれど……」

普通なら女子高の寮を、男子二名を女子寮に入れるのはかなりの問題がある気がするけど…

まあ、IS学園は色々安全だって聞いてるし、寮だと何かと便利なんだろうね。

荷物はいつでも運べるようにまとめておいたし、荷物は着てるのかもしれない。

一夏兄ちゃんが大浴場に入れないのが残念そうにしてたけど、仕方ないよ……

「1011号室……ここかな？」

ボクの寮は1011号室で、今そのドアが目の前に存在している。鍵を使おうとしたけれども、誰かいる可能性があったので、まずはノックを試してみた。

軽めにドアを叩き、部屋の中へその音を知らせるが、中から物音は全くしない。

ボクがドアを開ける、鍵は掛かっていなかった。

中に入る、そこはボクが孤児院にた時とは大違いで、

修学旅行に行った時に泊まったホテル以上に豪華な内装だった。

それにしても何で誰もいないのに鍵がかかっていないんだろう？と思った。

もしかしてシャワーとか浴びてて反応とかできないのかなあ？と思った矢先に。

「もしかして、同室の人か？」

シャワー室へ繋がると思われるドアから声が聞こえる。

「悪いな、私はさっきまでシャワーを浴びていたんだ。

私の名前は出雲護だ。こんな名前だが同じ女性——」

ボクと目が合う。

シャワーを浴びた後だから少しだけホコホコしているように感じた。

普通にこの学園の制服を着用してたけど…バスタオルだったら殴られてたのかな？

護さんの外見は茶髪で髪が短くて…胸がとても大きかった。

すると護さんは一瞬固まった後、ボクに言った。

「キミが噂の小学生か、確か翔と言ったかな？」

「は、はい。天野翔です、よろしくお願いします……」

「ああ、こちらこそよろしく頼む」

護さんは右手を出してきた。

ボクも右手を出して、護さんの手を握った。

なんだか優しそうな人で助かった。

でも、できるなら草薙お姉さんと同室がよかったなあ……

第四話 戦うと熱くなっちゃうのは作者の力量不足です

あれから一週間、ボクは織香お姉さんから勉強を覚えてもらい、早苗お姉ちゃんにISの操縦方法を教えてもらった。

その際になんでボクをクラス代表に選んだのか聞いたけれど、その理由は「もっと大きくなってほしいから」だって。ちよつとよく分からないなあ。

そういえば、ボク専用になる予定のISなんだけれども、どうやら最後にデータ取りをしたらしくって、まだ研究所の所にある。

だからISの量産型の「打鉄」でISの操縦訓練をしていた。そして、決闘の日――

「織斑先生、質問があります。」

多分、一夏兄ちゃんの疑問はボクと同じ疑問なんだろうな。

「なんで俺と天野が初戦なんですか？」

一夏兄ちゃんの言うとおり、まず最初にボクと一夏兄ちゃんが戦わなければならない。

「たかが一週間の訓練で代表候補生のオルコットに勝てると思うのか？」

今ここでお前たちを戦わせ、まだマシな方を戦わせるつもりだ」

マシな方かあ…でも、確かに一週間の訓練で勝てるのかどうか…でも、もう一つ、ボクには疑問があった。

「あの、織斑先生……ボクと一夏兄ちゃんの専用機が……」

まだ来てません、話によるとボクはともかく、一夏兄ちゃんにも専用機が与えられるらしいが、
まだ来てません。大切な事なので二度言いました。なにか事情でもあったのかな？

「だから今こうして待っているのだろう」

ごもつともな意見、ありがとうございます。
まだ来ていませんしね。セシリアさんには申し訳ないけど、待っててもらおう。

「お、織斑くん、天野くん！」

ぱたぱたと山田先生がこっちに走ってきて…

…転んだ、なんだかおっちょこちよいで、織子を見ているみたいだった。

「二人とも、専用機が来ました！二人の専用IS！」

ゴゴゴ…と、鈍い音がして、ピットの搬入口が開く。

そこから出てくる白のIS……これは多分一夏兄ちゃんのだろう。

ボクのは、その左の青いIS……腕に樽のようなタイヤがくっ付いてるのが特徴だ。

「これが……！」

一夏兄ちゃんは自分の専用ISに驚くような声をだした。

「はい！織斑くんの専用IS『白式』^{じやくしき}です！
天野くんの専用ISの名前は『電童』^{でんどう}ですよ！」

ボクは一度乗ったことのあるそれに背を任せるように座り…装着した。

一夏兄ちゃんは織斑先生から乗り方を教わって…ISを装着した。

「さて、二人とも、本番でものにしろ。

アリーナを使用できる時間は限られているからな」

「…え？」

ボクはいきなりすぎて、変な声を出してしまった。

さらっと織斑先生がトンでもない事を言ったように聞こえたけど……

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせろ。一夏」

一夏兄ちゃんの側にいた箒さんもさらっと酷い事を言う。

……たしか、このお姉さんに訓練頼んだら、剣道の訓練ばかりしてたんだけ…？

「翔くん。キミも幼いながらにして一匹の狼だ！すぐに乗りこなせ！
！困難をモノにしろ！」

…早苗お姉ちゃんまで厳しい事を言う。

「」「」「早く！」」「」

五人、山田先生と織斑先生と箒さんと早苗お姉ちゃんと織香お姉さんの声が同時に重なる。

ボクと一夏兄ちゃんはそそくさと移動し、戦うことになった。

「翔、手加減はしないぞ」

一夏兄ちゃんは本気でボクと勝負するようだ。

ボクは正直、痛くないなら戦うけど……

「ボクだって、負けない……」

かなり小声で、宣戦布告をした。

そして試合開始のブザーが鳴り、ボクは両手足のタービンを回転させながら構える。

（えっと、武器とかは……？）

打鉄で使用した時と同じにボクは電童から武器を取り出そうとするが……

【使用不可能】

【使用不可能】

【使用不可能】

【使用不可能】

【使用不可能】

【使用不可能】

…大切な物だから六個あるなんてワケではないんだろうね。

一夏兄ちゃんはブレードを手にとってこっちに接近してくる。

…こうなったら、素手で殴るしかない！

「はあああああ……」

一夏兄ちゃんは地上を滑走するように飛んでこっちに向かってきた。ボクは拳法のような構えを取って、上半身はそのポーズを維持したまま、

足に装着されているタービンを利用し、地面を滑走する…けど。

「うわぁっ！はっ速い速いはやーい！！」

「うおっ！？」

予想以上のスピードが出てしまい、焦ってしまった。

ボクは一夏兄ちゃんを轢いて、そのまま体制を崩し、倒れてしまった。

「うー…」

ボクは立ち上がり、一夏兄ちゃんが大丈夫かどうか確認しようとしたけれど、

これは戦いだって事を思い出して攻撃を仕掛けようとする。けれど

……

どこにもいない、左右前後を見回してみたけれど、存在が見当たらない。

……ボクはもう一つ、上空の存在に気づいて、とっさにその場を離れた。

すると上からブレードを構えて切りかかろうとする一夏兄ちゃんを上から降りてきた。

「うわっ！」

少し下がっただけではそのまま一夏兄ちゃんはボクに切りかかって

くる。

ボクはブレードの攻撃をくらってしまい、右腕の装甲が少し削れる。

「……だあ！」

ボクは右足で一夏兄ちゃんを蹴る、タービンを全力で回した結果、白式の装甲がへこみ、シールドにもダメージを受けていた。

（よし……！）

ボクは右手で殴ろうとするが、剣で攻撃を防御され、逆にこっちがダメージをくらっていた。

◇

「ハア……」

そろそろ体力が限界に近づいてきたのだろうか。

体のほとんどの装甲は剥がれ落ち、両手足のタービンが残った。

しかし、それもさっきまでの事だ。

でも、これでこの電童について分かった事がある。

この両手足に付いているタービンは電童の初期武装だって事。

かなり頑丈に作られ、何度も一夏兄ちゃんの攻撃を受けてもこの部分は壊れなかった。

それと、一夏兄ちゃんはブレードしか使っていないから、

もしかすると一夏兄ちゃんの武装はブレード一本のみかもしれないという推測。

…ボクの場合は武装、追加装備は全部使用不可能になってるんだけ

どね……

一夏兄ちゃんは疲れながらもボクに話しかけてきた。

「どうした…っ、これで終わりか？翔」

一夏兄ちゃんのISの外見はかなり変わってきている。

今は一夏兄ちゃんの機体の色は白くなり、姿も変わっている。

ボクのISも装備が全て再生され、胴体に装備が装着されている。

ISにとって胴体まで装備される機体は珍しいみたい。

あれから三十分くらい殴り合いと斬りあいをして経験を積んで…

ボクたち二人のISは専用機になった…って事みたい。

ボクの画面には確認のウィンドウが浮かんでいる。

それは多分一夏兄ちゃんも同じだろう。

「そろそろ行くぞ、翔！」

「ボクもっ……行きますっ！」

ボクと一夏兄ちゃんは同時に確認ボタンを押す。

するとボクは青い光に、一夏兄ちゃんは白い光に包まれた。

そして……

「…あれ？」

ボクが立っているのは真っ白な場所だった。

両手を見てもISは装備されていない、普通通りのボクの姿だ。

そこに赤い光がボクの目の前に現れる。

「……貴方は、とても優しい」

赤い光は確かにボクに対して言っていた。

「戦いの最中、相手を思いやれる――慈愛――の心……」

ボクに語りかけるように、赤い光は光り続ける。

「あなたは、一つの条件を満たし、データウエポンを解放させました。

…さあ、今こそデータウエポンと契約を結ぶときです！」

光は輝きを増し、視界が赤く染まる。

しかし、契約とは何の事なのかさっぱりわからない。

「契約って、どうするの？」

ボクは目の前の赤い光に尋ねた。

その答えはすぐに返ってきた。

「言いなさい、解放したデータウエポンの名前を…」

そして、電童とデータウエポンを結ぶ言葉を……！」

ボクは言った。…違う、叫んだ。腹から声を出して思いっきり。

普通のボクなら決して叫ばないけれど、今回はなぜか叫ばずにはいられなかった。

「ファイルセーブ！ドラゴンフレア……！」

そして目の前には剣を構え、白式を装備している一夏兄ちゃんが立っていた。

武器もあの凹凸が目立っていた剣ではなく、もっとシャープになっ

た刀とでも言うべき武器。

敵の情報を確認すると、雪片ゆきひら式型と言うらしい。

そしてボクの左足には新たな武装『ドラゴンフレア』が装備されていた。

その外見は赤い龍がボクの左足にくっついているような形で…上手に説明できない。

けれど、ボクはこの龍が左足について、とても嬉しかった…

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

「…ボクをマスターに選んでくれて、ありがとう。電童…」

「俺も、俺の家族を守る」

「…ボクは、選んでくれた電童の為に…」

「とりあえずは、千冬姉の名前を守るさ！」

「ボクは！電童の為に負けられない！」

両手足のタービンを全力で回転させる。

なぜかデータウェポンの使い方は分かっている…！

電童の周囲には赤い粒子が舞っている。

タービンをフル回転させてボクの周囲は空気が舞っているのが見える程になっていた。

「おおおっ！」

一夏兄ちゃんはブレードを構えてこっちに向かってくる。

これを発動させてボクの勝ちだっ！

「ドラゴンフレア！ファイナルアタックッ！！」

左足のドラゴンフレアから自分の身長以上はある大きな火炎のよう
なビームを発射した。

その一瞬、一夏兄ちゃんはボクの後ろで、剣を横に振りかざしたポ
ーズで固まっていた。

そして——この試合の終了を告げるブザーが鳴った。

『試合終了。両者ドロー』



「ここまで盛り上げといて、これがこの結果か」

「……はい」

「……ごめんなさい…」

ボクもあの時は「勝った！」と思っていたけれども…

それは一夏兄ちゃんも同じで、お互いに自分が勝ったと思ってたん
だけど…

「まさか、お互いにシールドを使い切ってしまうなんてな」

あの時…お互いに攻撃を食らって引き分けになったのではなく、
自分自身の発動した能力によってシールドエネルギーがゼロになっ
てしまった。

一夏兄ちゃん的能力はシールドを犠牲にして大ダメージを与える能力。

でもボクのはそれと同じようで、ちょっと違ったりする。

ボクの特異能力…ワンオフ・アビリティ単一仕様能力とは違うらしいんだけど…

ファイナルアタック、ボクがさっき使っていたのがその能力だ。

シールドを任意の数まで削り、それを攻撃力にして相手にダメージを与える技。

削れば削るほどその威力は上昇するが、外したりすると厄介な事になる諸刃の剣だ。

さっきは全力で倒そうとして、全てのシールドエネルギーを無意識に使ってしまったらしい。

ドラゴンフレアっていう武装についてはまだ分かってないけれども

……

あの時、慈愛がどうのこうの言ってたのと、何か関係あったのかな？

「本来ならここで勝利したヤツがオルコットとの戦闘をするのだが

……織斑、お前が行け」

「ええっ！？何で俺！？」

一夏兄ちゃんは驚いて織斑先生に抗議した、けれどもバンツと頭を叩かれた。

その理由はボクが小学生で体力も残っていないのに対して、

一夏兄ちゃんは鍛えてるし体力もある、それにISもほぼ修理済みなんだそうだ。

一夏兄ちゃんはしぶしぶと出撃した。

…一夏兄ちゃんとセシリアさんの試合を見て、やっぱり兵器なんだ…と実感できる。

あの時はどうやって攻撃するかと殴られて痛くないのかと考えていたけれども、

こうして遠目で見るとミサイルや銃弾が空中を舞っている。

…よくボクは死ななかったなあ…斬りかかれても大丈夫なのは分かっているけど…

なんだか、殺し合いがスポーツだって言ってるようで、なんだか怖くなってきた…

試合の結果はギリギリで一夏兄ちゃんの勝利で決まった。

明日にボクとセシリアさんとの戦闘をするみたい。

…とにかく今日は帰って休め、と織斑先生に言われたから、寮の自分の部屋に戻った。



「お邪魔ー!」

「こら、早苗。ちゃんとノックしないと駄目だよ!」

突然の来訪者、早苗お姉ちゃんと織香お姉さんだった。

ノックもしないで早苗お姉ちゃんがボクの部屋に入ってくる。

「えっ? あっ、ど、どうぞ…」

とりあえずボクは玄関から部屋に上がらせる。

「今日の試合、見たよ! スッゴクかっこよかったね!

それに、翔くんが叫ぶところなんて、初めて聞いたよ!

ファイルセーブ、ドラゴンフレアってね！それ多分電童の左足に出たアレでしょ？」

「…あの、もしかして、聞こえてました……？」

もしかして…嫌な予感しかなかった。

「うん！電童がボクを選んでくれてありがとうとか言ってたし、ドラゴンフレアの必殺技？ファイナルアタックとか叫んでたよ！あれ、すっごくカッコいいね！ねえねえ、今度お姉ちゃんに見せてよ！」

…今すぐボクは布団の中に入って足をバタバタさせながら耳を塞いで暴れたい。

…あの時ボクは電童がボクの物になって、浮かれていたんだ……それで、あんな事を口走って、しかも結果は引き分けで……

「ううう……」

ボクは泣きそうになる。

「こら、早苗。翔くんが傷ついてるでしょ？」

駄目だよ、そんなに簡単に喋ったら、口は災いの元って言うでしょ？」

「ああ、ごめんね翔くん。まさか気にしてるとは……」

早苗お姉ちゃんが謝ってくる。

「あの…ごめんなさい。ボクは……」

続きを言おうとしたけれども、がちやり、と部屋の扉が開く。
ボク達は玄関に視線を向けると、ルームメイトの護さんが帰ってきた。

「あっ、お帰りなさい」

ボクは護さんの帰りを迎える。

「ただいま。…その人たちは？」

「初めまして。私の名前は草薙織香と申します。

こちらが吉良国早苗。私たちは翔くんと面識があるから……」

「そうっ！何を隠そう私は同じ孤児院の出身で、

こっちの織香は翔くんの幼馴染の姉なのだ！」

織香お姉さんの言葉を遮って早苗お姉ちゃんが説明する。

衛さんはふむふむ…と言うような態度で聞いている。

「なるほど、興味本位などで訪れたわけでは無いのだな？

初めまして。私の名前は出雲護。二組でクラス代表をやっている。

」

…あれ？衛さんってクラス代表だったんだ。今初めて知った。

「へっ！クラス代表かぁ！って事はやっぱり強いワケ？

今一組はクラス代表を選んで戦争中だからねえ…ちなみに翔くんもその一人だよ！」

早苗さんはなぜか自分の事のように自慢げに話す。自慢できるところ

ろがどこにもないけど。

「その事なのだが…私も織斑一夏と翔の戦闘は私も見ていたからな。中々いい試合だったぞ。」

「…それで、だ。私は柔道部に所属しているのだが…翔、身体を鍛えて見る気は無いか？」

「…うーん、強くなるって事なら受けておくべきだけど…確かに何も装備の無い電童は素手に頼らざるを得ないけれども…今、ボクにはドラゴンフレアがある。遠距離攻撃もできと思う。けれど、それだけで電童が強くなったと言えるのかな…？」

「あの、ちょっと考えてみます…。」

「うむ。鍛えたくなったらいつでも声をかけてくれ。一度断ったから二度と鍛えてやらんとは微塵も思っていないからな」

護さんも優しいお姉さんだなあ…

今度セシリアさんと戦ったら考えてみよっと。

とりあえず、今日はもう疲れたから寝たいな…

「そういえば、織香お姉さんと早苗お姉ちゃんはどうしてここに？」

「戦いの感想を言いにきましたー」

「違うでしょ、早苗。私たちは翔くんの身体を鍛えるかどうか聞きに来たけれど…。」

「そーだった！でも護さんが鍛えてくれそうだし、この問題は解決

だね

もう用事もないしおねーさんは自分の巣に帰化する事にしよう。
アディオス！」

シュバツって効果音を出しそうにして早苗お姉ちゃんは帰っていった。

織香お姉さんはいつものとおり、ゆっくりと自分のペースで帰っていった。

「…嵐のような人物であったな。早苗とか言う人は……

翔、万が一の場合に言っておくが、困った事があれば私に相談したらいい」

「あ、は、はい…分かりました」

ボクはシャワールームへ行き、制服を脱いでパジャマに着替えた。
まだ七時頃だけれど、初めてISを動かしたので疲れてしまった。
ボクはベッドの上に横になって、そのまま眠りに落ちた……

キャラ紹介―三人のヒロイン＋1編

名前.. 吉良国 きらくくに 早苗 さなえ

年齢.. 15歳

性別.. 女

容姿.. 黒髪、それ以外はご想像にお任せします。

胸はぺったんこ。

参考.. 常に荒ぶっており、それを止めるストッパー役が常に必要である。

作者は正直名前に困り、ピンと頭に來た名前を付け、名前が合っていない事に後悔中。

翔と同じ孤児院出身で、翔の事を溺愛している。

織香との関係は中学生だった時に同じバレー部だった。

今は翔にISの操縦技術を教えるために帰宅部である。

作者の中でのイメージでは、魔法少女おりこ☆マギカに登場する

呉キリカ役をイメージしているが、面影が黒髪のみである。

吉良国進なんていなかった。

専用IS.. 無し

名前.. 草薙 くさなぎ 織香 おりか

年齢.. 15歳

性別.. 女

容姿…緑色の髪の毛をしている。以上。

胸はそこそこある。

参考…早苗の陰に隠れているが、織香がいなければ早苗は変人扱いされてしまい、

織香が空気になってしまうので、二人で一人の役割をしている。

翔が子供の頃に一緒だった草薙織子くさなぎおりこの姉であり、

翔の存在は知っていたが、姿を見たのは2、3回くらいしか無い。

早苗と同じく中学にバレエ部に所属していたが、翔に授業を分かりやすく教える為、帰宅部に。

作者のイメージでは早苗と同じく魔法少女おりこ☆マガカに出てくる

美国織莉子と、電童に出てくる草薙織絵をイメージしているが、

双方の面影が無い、それ以上に空気と化している。何とかしなければ。

専用IS…無し

名前…出雲護いづみご

年齢…15歳

性別…女

容姿…茶髪で、髪の毛が短い。胸がでかい。

参考…素直クールを目指そうとして失敗した例、無茶な事はするものではない。

箒とラウラを足して2で割った性格をしている。

女尊男卑などは意識せず、敵ならば男も女も老人でも若者でも関係なく叩き潰す。

他の二人と違い、翔とは初対面でルームメイトとして知り合った仲。

柔道部に所属しており、翔の体を鍛えようと持ち掛けた。

なぜ二組のクラス代表になっているのかと言うと、

この性格から中学時代の時に男女共に人気を得て、影でファンクラブが存在していた。

そのファンから代表候補生に推薦され。クラス代表となった。当の本人は、まあいいか。という感じでクラス代表を受け入れている。

ISを使用しても素手で殴ったりブレードを使ったりする近接戦が得意。

と、言うよりも銃が嫌いで、自分から使いたがらない。扱う事はできる。

銃器は嫌いだが、重火器は嫌いじゃないらしい。

過去にトラウマがあり、翔に姉と呼ばれるのを嫌っている。

名前…ドラゴンフレア

象徴…慈愛

属性…炎

能力…クラッシュレイ

ドラゴンフレアを装備する事で開放される能力。

ISの装甲を傷つけずに、直接シールドに40の固定ダメージを与える。

ドラゴンフレアを用いる攻撃は人や物に接触しても無害で、電子機器に直接ダメージを与える攻撃を放つ為、模擬戦に使われる。

これはファイナルアタックでも同様。

参考…赤い西洋の龍の姿をしているデータウエポン。

翔が一次移行をした瞬間に真っ先に解放された。

戦闘中でも優しい性格をしていた翔はドラゴンフレアを解放する事が出来た。

電童の左足に装備され、データウエポン特有のファイナルアタックは、

ドラゴンフレアの内部に電童のタービンと連動して高速で動き、

大量の熱を生成し、熱線として放出する。

ちなみに人や物にあたっても無傷で、電子機器のみを破壊する。

第五話　ボクは強くなる

……ボクは夢を見た。

いや、夢じゃないかもしれない。

けれども、ボクは夢に近いモノを見た。

いや、違う。夢は見えていない。むしろ感じていた。

ボクは知らずの内に、変な言葉を思い出しているようだった。

その言葉は……

やっと会えたね。

初めましてかな？

ずっと会いたかった。

話せられて嬉しいよ。

この四つだけだった。

夢かどうか分からない意識の中、ボクはなんだか懐かしく感じた。

「夢…なのかなあ……？」

気がつけば頭に入っている単語。

あれは夢、なのかな……？夢にしてはやけに現実味があるような気がする……

ボクがベッドの上でボーッとしていると、ドアが開けられる。

護姉ちゃんがジャージの姿で汗だくになってタオルを肩に掛けている。

ボクはボーッとしながら護姉ちゃんに挨拶をした。

「おはよう…護姉ちゃん……」

ここでボクは言っではならない事を言ってしまった。

なぜか護姉：護さんはボクにお姉ちゃんと呼ばれるのが嫌いみたいで、

最初は口で「言うな」とは言ったんだけど、しばらく気まずかったのを覚えてる。

「う、ごめんなさい！護さん……」

すぐに言い直す、けれども護さんは不機嫌そうなオーラを出している…

「う、ごめんなさい……」

二度謝る、けれども護さんは不機嫌そうにこっちに向かってきて、手を挙げる。

「ひゃっ……」

ボクは殴られると思って、目を閉じて頭を防御する……

けれども、いつまで経っても殴られなくて、ボクは護さんを見る…すると、護さんは手を挙げたままの状態だった。

「これは、君の弱さだ」

護さんは言い続ける。

「今、私が手を挙げた瞬間、君はすかさず殴られると思い、頭を防御した。」

私は頭が痒かったから頭を掻こうとしただけかも知れないのにだぞ？

いいか？これが実践だったら攻撃を受けているだろうな。
こんな事では君の専用ISの本領も発揮できないぞ」

確かに、護さんの言うとおりだ。

「いいか、翔。まず君は自分に自信を持つようにしろ。
…それと、今日君は…：確か…セリシアだったかな？」

「セシリアさんです」

「そう、その代表候補生と戦うのだろう。一つ、助言しておこう」

護さんはその言葉を言う。

「戦いの基本は格闘だ。肝に免じておけよ。
その意味は後に教えよう。今無理矢理教えて混乱させたくないからな。」

いいか、気持ちが悪くなった時が本当の負けだぞ」

護さんはそう言ってシャワールームへ入っていった。

後で聞いた事になるけど、護さんが汗だくになっていた理由って
いつも五時ごろに起きて、それから柔道とかの練習をしてるようだ。
…ボクも柔道部に入ったら、そこまでしないきゃいけないのかなあ？



翔は部屋から出て行く、時間からして朝食を摂りに言ったのだろう。
私はシャワーを浴びながら考える。

翔に姉と呼ばれ、少しでも不機嫌そうな態度を取ってしまった。
私があれば程までに過去を引きずっているとかな…

「くっ……」

なんで昔の事をいつまでも引きずっているのだろうか…？
もう忘れたつもりだが、翔を見るたびに思い出してしまう。
私にはまだ修行がしたり無いかもしれない。

「力は、心なり……」

私の父がよく言っていた言葉だ。



ボクとセシリアさんとの戦闘、これで笑っても泣いても最後だ。
もしこれで勝ったら…ボクが一夏兄ちゃんがクラス代表なんだろう
な…

ボクは首からぶら下っている歯車の形をしたアクセサリーを握る。

（来て、電童……！）

ボクは電童を装着し、戦闘をできる準備をした。

目の前には青いIS、セシリアさんの専用機『ブルー・ティアーズ』
が浮いていた。

しかしセシリアさんはブーツと何かを考えているようだった。

「あの、セシリアさん……？」

ボクはISの通信でセシリアさんと通信をした。

セシリアさんはボクの声に気づいて、こっちに返事をしてきた。

「…人が考え事をしているのに、話しかけてくるとはいい度胸ですわ」

…なんだか怒らせてしまったみたい。

「ご、ごめんなさい……」

電童が敵ISからロックされている、と警告を出している。

「私は小学生相手でも、容赦はしなくてよ！」

セシリアさんは手に持っている大きなライフルを発射する。

ボクはその攻撃を回避する。

「ドラゴンドライブ、インストール！」

ボクは電童の左足にドラゴンフレアを装備した。

これによって装備しているだけの間は電童にひとつの能力が解放された。

「クラッシュレイ！」

ボクはドラゴンフレアから赤い光線を発射する。

セシリアさんはそれを回避し、ボクをライフルで狙ってくる。

少しでも当たる確立を下げるために、ボクは空中を動き回る。

「さあ、踊りなさい！ 私たちの奏でる円舞曲で！」
ワルツ

セシリアさんはそう言うのと背中から四機のビットがこっちに向かってくる。

そして途中で周囲に拡散し、ビットはボクを囲んだ。

攻撃を回避するので精一杯で、とても攻撃を当てる余裕は無かった。

「回避するだけでは私を倒せませんわよ！」

確かに、セシリアさんの言うとおりだ。

このままでは確かに勝つことはできないだろう。

——戦いの基本は格闘だ。

ボクは朝の時に護さんに言われた事を思い出す。

もしかして、セシリアさんは射撃専門で、接近戦には弱いかもしれない。

…でも接近しても四機のビットで返り討ちになっちゃうかもしれない。

…ここは一つ、ビットを破壊できるかどうか試してみよう。

そしてセシリアさんの気を引くために、ドラゴンフレアを召喚する。

「ファイルロード、ドラゴンフレア！」

ボクはドラゴンフレアを左足から外し、その存在をこの世界に出した。

目の前に現れる赤い龍、その龍は本来の姿をした……ドラゴンフレア……だ。

「なっ……!？」

セシリアさんもこれには驚いているようだ。

実際ボクもどうしてこの事を知っているのかは分かっていない、頭……ではなく、体が勝手に動き、ドラゴンフレアを召喚した。

そしてドラゴンフレアは口から火炎弾を放ちながら、セシリアさんに向けて突撃した。

セシリアさんはその攻撃を受け、体勢を整えている。

「セシリアさん、ゴメンなさい！」

ボクは周囲を舞っていたビットの一つをタービンを使って殴り、破壊した。

それを同時にビットが少しだけ動くが、そうするとドラゴンフレアがセシリアさんを追撃する。

するとビットの動きが止まり、セシリアさんはドラゴンフレアを攻撃しようとする。

その隙にビットを破壊しようとしたが、ドラゴンフレアがセシリアの攻撃を食らってしまった。

そしてその隙を見られ、三機のビットがボクに集中して攻撃してきた。

「うわっ！」

ボクはすぐにこの場から離れる。

そしてドラゴンを元に戻す。少なくともこの戦闘では使用できないだろう。

「これで閉幕ですわ^{ファイナレ}」

セシリアさんは手に持っているライフルをこっちに構える。

「……電童」

ここで終わり、なのかな…？

少し無茶をしてドラゴンフレアを傷つけて、接近をしようとしたけど…

ビットを破壊しないと接近しても無理かと思ってドラゴンフレアに
罠を任せたけど、

結局それはドラゴンフレアを再起不能にできて…

このまま一撃でも攻撃を受けてしまったら、ボクの負けだ…

このままセシリアさんに攻撃されて、負ける……？

…ボクはこの試合で勝ちたい、最初は引き分けて、次の戦闘では勝
利したい…

負けてばかりではボクを選んでくれた電童に面目がつかないよ…

…ボクは、電童を信じて、負けを覚悟で接近して拳を叩き込んでみ
る。

そして、少しでも足掻いてみよう。勝てるのなら、少しでも…

「ボクは電童を信じる……！」

セシリアさんはトリガーを引き、ライフルから弾を発射した。

そして、ボクは再びあの時と同じ白い世界に居た。

そこではボクはISを装着しておらず、また未展開状態のままだった。

ここで、目の前に青い光と、同じ声が聞こえてくる。

「貴方はまた一つ、封印を解放しました……」

青い光は輝きながらボクに話しかけてくる。

「貴方は、信頼、する心を抱いてくれました……」

「貴方は再びデータウェポンを解放させました。

…さあ、言いなさい！信頼を象徴とするデータウェポンの名を！」

光は輝きを増して、ボクの視界が青く染まった。

そこでボクは躊躇いもなく、その名前を口にしていた。

「ファイルセーブ！ユニコーンドリル！」

そしてボクはセシリアさんの攻撃をくらった。

しかし、ボクのISのシールドのエネルギーは全く減らなかった。

「なっ…なぜシールドが減りませんの！？」

それはボクの右手に装備された青い一角獣…ユニコーンドリル…の能力だ。

ユニコーンドリルの特徴はユニコーンと言われるだけはあるドリルだ。

ドリルと言っても、工事現場で見つけるようなドリルではなく、むしろレイピアと言っても間違えられないくらい細いドリルだ。

「ファイアーウォール……」

ボクはセシリアさんに向かって突撃する。

セシリアさんはライフルを使ってもう一度ボクに攻撃しようとしてくる。

しかしユニコーンドリルの能力…ファイヤーウォール…を発動させる。

目の前に赤い膜のようなモノが浮かび上がり、それはセシリアさんの銃弾を防いだ。

ボクのシールドは一つも減っていない。

「くっ……なら、ミサイルはどうですの！」

セシリアさんはスカートの一部が動き、そこからミサイルを発射した。

今のボクのシールドエネルギーを確認する。

残存シールドエネルギー98、ファイナルアタックに使用する最低値は80くらいだ。

ボクは使用するエネルギーを10に残し、残り全てをファイナルアタックに使用する。

ミサイルもファイヤーウォールで防ぎ、ボクはセシリアさんの目の前に到着した。

ここでボクは両手足のタービンを全力で回転させ、周囲に赤い粒子が浮かび上がる。

「ユニコーンドリル！」

ボクは右手を全力で伸ばし、セシリアさんに触れるようにした。けれども、少しだけ距離が遠い。

もっと、少しでもいいから近づければ倒せるのに……

ボクは瞬時加速を（イグニッション・ブースト）を試してみる。

目の前にはセシリアさんが目の前にいた。

このまま……いける！

ボクは右手に装備したユニコーンドリルの先端をセシリアさんに思いつきり突く。

「ファイナルアタック！」

しかし、ボクはまだ気づいていなかった。

まだ残っていたビットがボクを狙っていた事が……

「試合終了。勝者——セシリア・オルコット」

ボクは最後の最後で、油断していたんだ……



「……か、翔！」

一夏兄ちゃんがボクを呼んでいる…

けれども、ボクは一夏兄ちゃんを無視して寮に戻ってベッドに寝転がった。

「……………」

布団を全身に包み、枕で頭を隠す。

あの時、ボクはセシリアさんに勝てなかった：

いや、電童を勝たせてあげる事ができなかった。

もっとボクが電童のことを知っていたいれば、信じておいたら……

「ううっ…」

思い出すと、目から涙が溢れてくる。

それを止めようと涙を腕で拭いたけれど、それでも涙は溢れてくる。

「ただいま。翔、今大丈夫か？」

護さんが部屋に帰ってくる。

ボクは目を擦り、無理矢理涙を拭って護さんを見る。

「な、なに…？」

護さんはボクを顔をじつと見ている。

ボクにむかって一言だけ言った。

「悔しいか？」

「…うん、たぶんそうかも…しれない」

「かもしれない、とは？」

「ボクはクラス代表を決めるために戦ったんじゃない…
最初に一夏兄ちゃんと戦ったときは引き分けだったから…
今度こそ、ボクは電童と一緒に勝ちたかった、なのに…」

「…なのに、負けてしまったか…」

ボクは黙って頷いた。

このままじゃ、駄目だ……

今のままだと弱いままだと、電童も喜んでくれない…

「…うっ…んうっ…」

やっぱり、負けたことを思い出すと、どうしても泣いてしまう。
ゴメンね、電童…こんな不甲斐ない操縦者で……

ボクは無理矢理泣き止もうとして涙を拭こうとした。
けれども…

「翔」

護さんがボクを抱きしめていた。

「男なら泣くな、なんて事は言わない…

泣きたい時は泣けばいい、そしてゆっくりと寝ろ」

護さんの言葉に、ボクは甘えて思いつきり泣いた。

このまま甘えさせてもらっては悪いし、護さんをお願いをする。

「…護さんっ…ボ、ボクをっ……き、鍛えてくださいっ…」

「ああ、教えてやるさ。

今日はもう疲れただろう？明日から教えてやるさ」

ボクは護さんにぎゅっと強く抱きしめられた。

その胸でボクは思いつきり泣いて、いつしか疲れて眠ってしまった。



「…翔？眠ってしまったのか…」

私は胸に顔を埋めて泣いていた翔をまずはベッドへ寝かせた。

その後に私は翔の制服を脱がし、いつも着ている寝巻きに着替えさせた。

私も寝巻きに着替え、照明を消し、ベッドに横たわった。

「……………」

何時以来だろうか？弟と呼べる存在を抱きしめたのは…

第六話 皆の手助けが無いとボクは…

「ん……？」

朝だ。ボクは目が覚め、ベッドから起き上がる。

昨日は確か…護さんに抱きしめられて、思いっきり泣いて…

…そういえば、制服のままだったのに、なんでパジャマなんだろう？
途中で起きて無意識に着替えたのかなあ……？

「お、翔。起きているな」

ドアが開き、護さんが入ってくる。

やっぱりジャージの姿で、汗だくになってタオルを肩に掛けていた。

「あの、昨日はどうも…ありがとう……」

ボクは昨日あったことを思い出し、感謝の言葉を言う。
それに対して護さんはクールな態度で。

「気にするな、泣きたいときは誰だってあるしな
ましてや翔は小学生だ。まだ甘えるくらいの事は許されていいだ
ろう」

と返してくれた。護お姉さんカッコいいです。

そういえば、制服だと思ってたのにパジャマに着替えてたのはどう
したんだろう？

ボクはその事を聞いてみた。

「私が着替えさせたぞ。制服のままではシワが付いてしまうのでな」

…え？

「何か問題でもあったか？」

「え…あ、その…」

ボクは顔を真っ赤になる。

だって、着替えるってことは…

「どうした？ 君は下着が見られる事に羞恥心を感じるのか？」

…すまないが、私にはあまり恥じらいといった感情があまり無くてな…

そういえば、昨日の朝に言った言葉の意味を説明していなかったな。

私がこうなった理由も含め、説明しよう」

護さんは説明する。

「戦いの基本は格闘だ。と私の師である父は言っていた。それには私自身もそう思っている。

射撃武器を装備していても、小型の拳銃等は接近戦で対処できるが…

長距離射撃用のライフル…オルコットが持っていたような物だな。あれの場合は接近されると至近距離などでは撃てる代物では無いだろう。

接近武器を持ったとしても、その武器が使用不能になったり、手から落したりしたら…

そこにあるのは素手のみだ。拳は鍛えなければ武器としては全く使い物にはならない」

確かに、護さんの言うとおりだ。

「それに翔の電童は武装がある…が、最初には何も無かっただろう？
オルコットとの戦闘を見たが、武装が損壊し、使用不能になって
いただろう？」

あの場合には新たな武装を装備できたからいいものの…普通ならあ
そこで負けただろう。」

あの時、ユニコーンドリルが無ければボクは間違いなく負けていた。
これは分かる。

「これが私の言った言葉の意味だ。

それから私が羞恥心を持たない理由なのだが……

私はスカートを履く事がある。そこで蹴りを使ってみる。丸見え
だ。

それに下着は露出を防ぐ為にある物だからな…

だから私は下着を見たり見せたりする事に抵抗は無い……」

スカートを履いてる時に蹴りを入れる状況がよくわからないけど…
とりあえず、色々あったんだなあ…って事は分かった。

「さて、今日から翔を鍛えようと約束したからな。

放課後には勉強と訓練があるからな…やはり朝がいい。

軽くグラウンドを一周するから、朝の五時までには起きててくれ」

…明日から、頑張ろう。



「では、一年一組代表は織斑一夏くんと天野翔くんに決定です。

あつ、天野くんは出席番号一番だし、一夏くんと1繋がりでいい感じですね!」

山田先生は嬉しそうに喋っている。そんなに男が珍しいのかな？それより、聞きたい事がいくつかある。

「先生、質問です」

先に質問したのは一夏兄ちゃんだ。

多分、今回も質問の内容は一緒だろうな。

「はい、織斑くん」

「なんで代表が二人もいるんですか？」

やっぱり、質問の内容は一緒だった。

「誰もクラス代表が一人とは言っていないぞ。

それに織斑、お前に何かあったときは天野に対応してもらう事になる。

言うならば、天野はクラス副代表と言ったところだな」

「それじゃあ、翔を代表に――」

バンッ!と鋭い音が一夏兄ちゃんの頭から聞こえた。

っていうか、さり気なく一夏兄ちゃんはボクにクラス代表を擦り付けようとしてたけど……

「織斑、小学生相手にクラス代表を押し付けるな
それにお前はオルコットに勝ち、天野はオルコットに負けた。それを忘れるな」

一夏兄ちゃんは頭を手で押さえ、何で勝っちゃったんだ…と、後悔している。

…でも、ボクは負けたのに、なんでセシリアさんが副代表じゃないんだろ？

「あの、なんでボクが副代表扱いになってるんでしょうか…？

ボクはセシ……オルコットさんに負けたのですから、オルコットさんが…」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

セシリアさんはがたん、と席を立った。

相変わらず腰に手を当ているポーズが様になっている…けど、いつもそのポーズだなあ…

セシリアさんが言うには、

まずセシリアさんに勝った一夏兄ちゃんがクラス代表になるのは当たり前前で、

経験が無いボクには様々な経験を貰えるチャンスをあげた…だそうです。

「クラス代表は織斑一夏、天野翔。異存は無いな」

クラス全員が一丸となって答える。ボクと一夏兄ちゃん以外は。

「…ああ、そうだ。吉良国と草薙は昼休みに私の所まで来い」

織斑先生はまた思い出したかのように言った。

けれども、どうしてあの二人が呼び出されるのかな…？

織斑先生が言った言葉に周囲もざわつき始めた。

「シー？もしかすると私たち専用のISとかの話かなあ？」

早苗お姉ちゃんのはのんきそうに織香お姉さんに言ってた。

「違うわよ、私たちは代表候補生じゃないのよ。一体何かしら…？」

織香お姉さんは逆に不安そうだった。

何も問題が無ければいいんだけど…



「来たな。吉良国に草薙」

昼休み。私たち織斑先生に呼ばれて職員室に来た。

早苗はなんだか落ち着かない様子。いつも落ち着いていないけれども…

「それで、用件は何でしょうか？」

「ああ、お前たち、専用機を持つ気はないか？」

…まさかの、早苗が言ったとおりだった。
でも、突拍子も無い話で何がなにやら……

「言ったじゃん織香！やっぱ専用機の話だ！
ワイは悪くない、間違ってたんや！」

いつもの調子に戻った早苗。

ここで織斑先生による鉄拳制裁が早苗に襲い掛かる。
たまには私もゆっくりと突っ込み時があるしね。

「天野はまだ小学生だ。勉強どころかISの整備もままならないからな。」

その問題を解決するために、GEARが一つの条件を出してきた」

「…GEAR？」

早苗が織斑先生の言った言葉に疑問を抱いた。
私も聞いたことが無い。

「GEARは天野の専用IS、電童、を開発した組織の名だ」

…なるほど。翔くんの専用ISは拾ってきたってワケじゃないからね。

「話を戻すが…GEARは生徒の中から一年生から三名を選び、
その三名は天野の面倒を見る変わりに、専用機を用意するとの事だ
ただし、その専用機は学校を卒業すると返還する事になるがな」

つまり、翔くんの面倒が公式に認められ、かつ専用機が貰えるって事か：

「お前たちは天野の面倒を見てやってるのだろう？」

丁度いい、お前たちはこの話を受けて専用機を貰っておくといい」

至れり尽くせり：いや、尽くさせられりかな？

でも、疑問に思った点があるから、私はそれを聞いてみる。

「織斑先生、質問していいですか？」

「なんだ？言ってみろ」

「一年生から三人：と言っていましたか、

残りの一人はどう選ぶ気なのでしょうか？」

さっき織斑先生は三人を選ぶと言っていた。

「それなんだが：今度トーナメントを開き、それで優勝した者を選ぶ気でいるが……」

「なら、私はそのトーナメントに参加しますよ」

織斑先生の言葉を遮り、早苗がトーナメントに参加すると言った。

「なに？お前は……」

「私たちは利益を得るために翔に操縦技術や知識を教えたわけじゃないです。

ここで専用機を受け取ったら周囲から怨まれますよ。

だから実力で勝ち取って、改めて公式に翔に色々な事を教えるつもりですよ」

「私も早苗と同じ意見です」

「なるほど、いい心がけだな。だが……」

織斑先生は早苗の頭を殴る。

「人の話は最後まで聞け、いいな？」

「はい……」

頭から煙を出しそうな勢いだ。

こうして私たちは自分から美味しい話を蹴って、学校から見ても合法的に翔くんの勉強を教える事ができる権利を獲得するチャンスを得た。

明日からは休んでいられないかもしれないな……

天野くんはルームメイトの護さんと一緒に体を鍛えるって言ってたしね。

私たちだって、負けていけないね！

番外編 吉良国早苗の許されざる日記（危険度0）

最初のページ

警告 ここから先は見えてはいけない

二枚目のページ

（ページは切り取られている）

三枚目のページ

貴様見ているな！

この日記は私だけが見ていい代物だ。

例えば私が溺愛する天野翔であろうと容赦はしない！

うん、疲れた。ふざけるのは言うだけだね。

書くのは疲れるよ、茶番終わり。

次の日から真面目に書く事にしよう。

四枚目のページ

翔くんがイギリス代表候補生に喧嘩を売られた。

なんか同じ男性なら決闘を受けるべきとか言ってたね。

まあクラス代表を賭けての決闘だし、私たちが推薦したから参加は当たり前か。

とりあえず、しばらくは翔くんと一緒に練習できるって事が嬉しい。嬉しすぎてハイッ！ってヤツになりそうだ。

五枚目のページ

あれから四日後、日記は書き忘れたワケじゃない、しばらく飽きたただけだ。

我が親友である草薙織香は翔くんに勉強を教えたりしている。

やっぱり小学生で高校生の勉強は難しいから、改めて勉強を教えるしかないんだろうな。

そしてその件で問題が起きた。三年生が翔くんの勉強を教えてあげると言い出した。

織香は断るのではなく、翔くんに色々な人から教えてもらったほうがいいから、と言いつつ

その三年生に勉強を教える事を進めた。

しかし、その勉強は一日どころか1時間も持たなかった。

なぜなら、その三年生の教え方が下手だからである。

翔くんも翔くんでは何がなにやら分からなかったみたいだけど：

だからと言って三年生を責めるのは間違いだろう。

むしろ驚くべきなのは今まで翔くんに勉強を教え続けてきた織香なのである。

親友の織香は妹がいる、織子と言って織香と同じ可愛く、四歳ほど離れた妹なのだが：

書いてはいけないのかもしれないが、織子ちゃんの頭はかなり弱い。どのくらい弱いかは明白にできないが：青い低身長ロボットが様々な問題を解決する漫画で、

それに登場する眼鏡が目みたい駄目な小学生と同じくらいである。だから勉強の教え方はかなりうまい、教えるだけなら教員免許は三回取れるんじゃないかな？

将来は小学校の教師になりたいと言っていた織香は子供の面倒を見るのがうまい。

：なんでIS学園に入学したかは、私も知らない。

っつーか最近翔くんはルームメイトの出雲護さんに対して好感度上げすぎだろ

ちしょー！私の訓練がそこまで分かりにくいのか！ちくしょー！

まあ、織斑一夏殿に比べるとマシとは言え…

うん、まあよしとしよう。

私たちの練習風景があんまり無かったのは作者の力量不足だよねー☆
…え？メタ発言禁止？

七枚目のページ

一夏殿と翔くんが戦った。

翔くんのISである電童がかなりトリッキーすぎる件。

一夏殿翔くんも接近戦のみ、射撃武器が無いのか。

なら私が教えた射撃訓練は一体何だったのか。

まあ基本操縦技術も大方教えたし、後は何とかなると思った。

うん、グデグデすぎる戦いでした、素人同士だしね。

でも二人のISが専用機となった時に変化は起きた。

翔くんは普段は叫ばないのになにやら叫んでいたし、

一夏殿もなんか武器が変わってるし。

しかも二人はお互いに勝ったと思いついていたらしく、

試合の結果には驚きを隠せなかったみたいだ。

…まあ、翔くんの戦闘は次の日だし、

今日はもうとくにする事は無いかな…？

暇潰しに翔くんがIS学園に訪れた経歴をノートに書いてみますか…

第七話 今日から本気出す

「お前ら席に着け。帰りのSHRを始める」

織斑先生が教壇に立ち、帰りのSHRを始めた。

「まず連絡だが…今度クラス対抗戦とは異なるトーナメントを開催する」

…この前にクラス代表を賭けて戦ったのにまた戦う事になるのかなあ…？

「この大会だが、優勝した者には専用機が与えられるが、同時に天野の面倒を見る事になる、これに関しては学校側も認めている」

織斑先生のこの言葉で一気にざわつき始める教室。
「…どうかボクの面倒って…？」

「静かにしろ！…専用機に関しては授与されるときに教える、全員知っていると思うが、天野は年齢的にはまだ小学生だ。」

ISの点検、修理や専用機のデータを本部に送ることすら間々ならんからな」

…そういえば、ボクのISのデータは本部に一回も送っていない。これってもしかして、怒られる？

「トーナメントに参加する者は三人一組で申請書を私に出すように。別のクラスの人と組んでも構わない。当然だが専用機持ちは参加

できないからな」

三人一組？できればボクの知ってるお姉ちゃん達だったらいいなあ…

「連絡事項は以上だ」

と言って織斑先生はこのままSHRを終え、放課後の時間となった。



「というわけでっ！織斑くんと天野くんクラス代表おめでとう！」

ポン、ポンとクラッカーが鳴る音が響く。

寮の食堂は沢山のお姉さん達で一杯になっていた。

ふと壁を見てみると『織斑一夏&天野翔クラス代表就任パーティー』
なんて書かれた紙がおっきく貼られてあったし…

そんなに男子が珍しいのか、それともそれを理由にして騒ぎたいのか…

もしかするとどっちも同じ理由だったりするのかな？

「はいはい、新聞部です。話題の新生、

織斑一夏君と天野翔君に特別インタビューをしました！」

おくと周りが盛り上がる。やっぱり男子が珍しいのかな？

「あ、私は二年の黛^{まゆずみ}薫子^{かおるこ}。よろしくね。

新聞部やってまーす。はいこれ名刺」

ボクは渡された名刺を受け取る、名刺を受け取る事なんて初めてだ。ちよつと嬉しい。

「ではずばり織斑君！クラス代表になった感想を、どうぞ！」

そう言つて音を録音する機械みたいなのを一夏兄ちゃんに向けた。

「えーと……」

一夏兄ちゃんは一しばらく黙つた後に少しだけ言つた。

「まあ、なんというか、がんばります」

「えー。もっといいコメントちょうだいよ。俺に触れるとヤケドするぜ、とか！」

新聞部の人はそういう風にコメントを求めているものだったけ？

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」

一夏兄ちゃんは何を言っているのかちよつとよく分からないですね。

「じゃあまあ、適当にねつ造しておくからいいとして、次に翔君！同じくクラス代表になった感想をどうぞ！」

と言つて機械をボクの口元にグイッと近づけてくる。

「えっと……」

ボクはしばらくコメントを考えた。

「ボ、ボクはまだ小学生でしかも男性でかなり場違いですけど……えっと、その……副代表とは言え、選ばれたからには頑張ります」

パチパチパチ、と周りの人が拍手をしてくれた、正直に言うとう嬉しい。

「ありがとうね、翔くん。これでいい記事が書けるよ」

と言って新聞部の先輩はボクの頭をわしゃわしゃと撫でてくれた。

「ああ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

思い出したかのようにセシリアさんにコメントを求めている。

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

と言いつつも満更でもなさそうだ、なんだか嬉しそうな表情をしている。

「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退しかたかというと、それは――」

「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだい。」

自分で聞いておきながら……割と早苗お姉ちゃん級の自由度を持って

いるように感じる。

ここでセシリアさんが惚れたからって事で譲ったと新聞部の先輩はねつ造すると言ったけど…

そのときにセシリアさんの顔が赤くなった。もしかして一夏兄ちゃんの事が好きなのかな？

その事を否定する一夏兄ちゃん、一夏兄ちゃんが違うって言うなら多分違うのかも。

「はいはい、とりあえず三人で並んでね。写真撮るから」

「えっ？」

セシリアさんは意外そうな声を出す。

「注目の専用機持ちだからねー。スリーショットもらうよ。」

あ。握手とかしてるといういかもね」

ここでセシリアさんが何だか顔を真っ赤にして手を握ったりしてた。ボクは一夏兄ちゃんの隣に並んで手を握った。

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は？」

「えっ？えっと……2？」

「な、70くらい？」

「ぶー、74・375でしたー」

ボクの答えは結構近かったなあ…

と、いうかボクたちの周りにクラスメート全員が並んでいた。

セシリアさんは怒ったけど、皆から抜け駆け禁止とか言われてた。
：あれ？早苗お姉ちゃんと織香お姉さんがいない……
辺りを探してみるけど、やっぱり居なかった。参加してないのかな？

「ねーねー翔くん、ケーキ食べる？」

そう言ってクラスメイトのお姉さんがケーキを乗せた皿を持っていた。

笑われるかもしれないけど、ボクは甘いものが好きで、特にケーキは大好きだ。

「食べる！」

ボクは無邪気そうに言ってしまった。

甘いものには目が無い……と言ってしまえば言い訳になっちゃうだろう。

「はい、あーん」

お姉ちゃんはフォークで刺したケーキをボクの口元に持ってきた。

「あーん♪」

ボクはそれを口にした。すごく美味しい、思わず頬が緩んだ。

：なんだか周りで鼻血を出してる人がいるけど、どうかしたのかな？



「……！」

私、吉良国早苗と友人草薙織香、そして翔くんのルームメイトの護さんと一緒に

第四アリーナでISの操縦訓練と模擬戦をしていた。

少しでも優勝する為に、一回戦敗退なんて恥ずかしくて翔くんに顔見せられないね。

目指すは優勝あるのみだ！

「それにしても、よかったの？早苗」

織香は私に問いかける。多分今日行っている一組の就任パーティの事だろう。

「そりゃあ私だって騒ぎたいけどね…それ以上に優勝したいのさ」

私は織香に答える。それに護さんは反応した。

「いい心がけだ。吉良国は射撃の腕がいいからな、バックは頼むぞ」

「そう言う護さんこそ、前衛はお願いしますよ。背中を守るから」

「私だって、二人を援護するくらいの事はしますよ。」

二人とも危なっかしいから、どっちも援護できるように訓練しなきゃ」

よし、前衛も後衛も決まったことだし、このまま訓練を続けよう。護さんは柔道やってたから接近戦にかなり強い、剣も扱える。

ただ、本人は銃は使いたくないようで遠距離戦に持ち込まれると厄介だ。

そこで私の出番、と言うわけだ。なぜか私は射撃がうまかった。子供の頃からエアガンでサバゲごっこしてたからだろうか？

織香は射撃も格闘も普通、オールマイティと言ったところだ。逆に言えば長所が無い。

私たち三人で、優勝を目指せるように、少しでも特訓しておかないと…

今一番頑張って訓練してる翔くんに笑われちゃうしね！

第八話 改めてよろしくお願いします

ボクは今日も不思議な夢を見た。

この前と同じで見たと言うよりは聞いたのと同じだった。

ボクの事をカイ、カイってずっと呼び続ける夢。

ボクの名前は翔で、カイなんて名前じゃないし、知り合いもない。

それでも頭の中でボクの事をカイって呼び続ける。

ボクはカイじゃない！って叫ぼうとしたところで――――

「起きろ翔。走るぞ」

護さんに無理矢理起された。

護さんは青いジャージを着ていて、もう既に準備はできていた
朝早くから体を鍛える為に軽めにグラウンドを半周する。

それが終われば体力を作るために色々なトレーニングをしたり……
これら全てはボクが護さんに対して頼んだことだ。

ボクの専用ＩＳ電童は装備がなければ接近して格闘をする事になつてしまうので、

護さんから体力作りから格闘技術の基本を教えてもらっている。

ボクは重い体を無理矢理動かして、ベッドから起き上がった。

気軽に着替えられるように護さんは既に外へ出ていた。

あまり待たせないためにも、ボクは素早くジャージに着替え、扉を開けた。

「さ、行くぞ」

扉の側で待っていた護さんはボクが準備できたと確認すると、グラウンドに向けて足を運んでいく。ボクはその後ろについていった。

「…さて、今日はこのくらいにしておくか……」

護さんはボクと同じトレーニングをしていたハズなのに、息も切れずに涼しい顔で持ってきたタオルで汗を拭いている。

「…ねえ、護さん」

「…どうした？」

「今日、勝てると思う？」

ボクは今日開催される専用機三機を賭けたトーナメント、護さんも早苗お姉ちゃんも織香お姉さんも三日前のボクと一夏兄ち

やんの

クラス代表就任パーティに参加せず、夜遅くまでISの操縦訓練をしていた。

…でも、あれから二日しか経っていないけれど……

それを心配してボクはこの事を護さんに聞いたけど、返ってきた言葉は。

「大丈夫だ」

と、いつも通りの反応だけれど、どこか自信に満ちているような気がした。

今日はボクの協力者を決定する大会があるので、教室で授業はしないで、

その大会の様子を見ているだけ、という授業スケジュールになっている。

この大会は1年生だけなので。2，3年生は普通に授業をしているみたい。

ボクはアリーナの観客席の扉を開け、クラスメートに挨拶をした。

「おはようございます…」

クラスメートはほとんど全員お姉さんと言うのが、まだちょっと慣れない。

その為か、やっぱり声は少しだけ小さくして言ってしまった。

ボクの声に反応してお姉さん達も挨拶を返してきてくれた。

アリーナの観客席はいつもより空いていた、ほとんどは大会に参加

しているからだ。

とはいえ、三対三で戦うし、参加人数も限られているので、今日一日で大会は終わるみたい。

「おはよう、翔」

席に座ってしばらくしていると、後ろから一夏兄ちゃんに声をかけられた。

一緒に箒さんも隣に立っていた。やっぱり二人は幼馴染って事で一緒にいるみたいだ。

「おはよう、一夏兄ちゃん」

ボクは一夏兄ちゃんには普通に話したりする事ができるから好きだ。やっぱり同じ男同士なのは落ち着くかもしれない。

一夏兄ちゃんはボクの隣に座る。

それに続いて箒さんも一夏兄ちゃんの隣に座った。

「やっぱり翔は知ってる人に優勝してほしいか？」

「うーん……知ってる人の方が安心する、かも……」

でも……なんだろう？うまく言えない……」

正直に言っていると、これで勝った人がボクのIS関連のお世話をするって話だけど、

……多分、護さんや早苗お姉ちゃんと織香お姉さんはこの大会の結果がどうなっても、

ボクを見捨てない、そんな感じがしていた。多分ボクは三人を信頼してるのかな？

「ふーん、そっか……箒は参加しなくてよかったのか？」

一夏兄ちゃんは箒さんに話題を振る。

「ああ、私はこんな大会に興味は無い、興味があるのは……」

箒さんは途中で小声喋っていて何て言ってるのかわからなかった。けれども、なぜか顔を赤くしてちよっともじもじしてた気がする。

『これより、GEAR主催による大会を開催いたします！』

アリーナ中に実況の音が響く、その声は多分IS学園の関係者じゃないだろう。

でも、どこかで聞いたことのある声のような気がする……

『本日の実況を勤めさせていただく、

GEAR本部IS研究開発部門部長兼試作IS起動実験搭乗者、アイリス・ウィラメットと申します、皆さんよろしく願ひします』

どこかで聞いたかも、と思えば名前を聞いた瞬間に思い出した。

ボクが初めて電童を起動してその稼動データを取らせてと言われた時、

ISの基本操縦や扱い方を教えてくれた人だ。

でも、多分長々と語っていた肩書きのようなものから察すると、もしかして相当偉い？

そんな偉そうな人がわざわざこの大会の実況の為に来ていいものなのか……？

『皆さんはご存知かと思いますが、大会で優勝した場合、

天野翔くんのIS関連のサポートをして頂きます！

そのお礼も兼ねて、わが社が製造した試作の量産型ISを専用機として提供いたします！』

まさに大盤振る舞い、と言いたいけど…卒業するとISは返還するんだよね…

やっぱりISのコアの数量が限られてるっていうしね…

『では、早速第一回戦を開始します！えーっと…

どうやら参加者名以外にもチーム名があるみたいですわね。

それでは、赤のピット・ゲートから登場する三名、所定の位置について下さい！』

そうアナウンスが流れると、ISを搭乗した三人がアリーナに姿を現した。

『皆さんから見て右から伊集院志野さん、七原律子さん、サラ・レイナードさんです。

全員が打鉄での参戦ですね。チーム名は…シヨタっ子天野きゅん親衛隊…だそうです』

隣にいた一夏兄ちゃんが突然吹きだした、そして箒さんに怒られた。なにに対して吹き出したのだろう？

『続いて青のピット・ゲートで待機中の三名は所定の位置について下さい！』

再びアナウンスの声が響くとピット・ゲートから三人が空中へ移動した。

その三人はボクにとってとても見覚えのある人たちだった。

『右から草薙織香さん、吉良国早苗さん。二人はラファール・リヴ
アイブでの参戦ですね。』

そして左にるのは出雲護さん、この中で一人だけ打鉄です。

チーム名は：気合・努力・根性：だそうです』

多分：いや、絶対にチーム名は早苗お姉ちゃんが考えたに違いない。

『それでは両チーム、位置につきましたね？試合：開始です！』

アナウンスが試合の開始を告げた瞬間に、六人は一気に動き出した。

「……あれ？」

試合を見ている途中、ボクの胸元で妙な違和感を感じた。

電童が待機状態になっている首からぶら下げている歯車のアクセサ
リーがブルブルと震えてる。

そしてアクセサリーは自然と宙に浮かび、青い光を放っていた。

その青い光の正体は……

「ユニコーン……？」

歯車のアクセサリーから出てきたのは、馬に一本の角がついている
ユニコーン、

ユニコーンドリルの姿が目の前に存在していた。

ユニコーンは馬の特有の鳴き声を発した後、ボクの右肩に乗った。

この様子を見ると、ユニコーンは試合を見ているように見えるけど
……

本当の理由は、本人しか分からないんだろうなあ。

「か、翔？それってユニコーンか…？」

一夏兄ちゃんが突然現れたユニコーンに驚いている。
正直、ボクもこんな形で出てくるとは思っていなかった。

「あっ…えっと、それよりも試合見ないとね！」

とりあえずボクはごまかした。

ボクでもユニコーンが出てきた理由がわかんないから…



「私がISだ」

「いきなり何を言ってるの、早苗」

やはり我が友人は突っ込みを入れてくれる、嬉しい限りだ。

「うーん、まあ緊張してガチガチになっちゃうよりはマシでしょ？」

「確かにマシかもしれないが…浮かれ過ぎてミスをしないうにな」

このハードボイルドなのが護っちで、翔くんのルームメイトだ。

まあ私たちは最初っから翔くんの世話をしているし…

もし私たちが優勝しなくても翔くんを見放したりはしないし。

『続いて青のピット・ゲートで待機中の三名は所定の位置について下さい!』

アナウンスから私たちは出撃するように命じられた。
出撃するには…これをやるしかないでしょう。

「吉良国早苗、出撃!」

そう言って私はピット・ゲートから出撃する。

「…草薙織香、出ます!」

おお、織香も乗ってくれた。

流石私が見込んだ女だけはあるな。

「……………出雲護、参る!!」

意外にも護さんも乗ってくれた。

やっぱりチームワークは大事だね、私が崩しかねないけれども。

うん、自覚はしているんだ。すまない。私は誰に謝っているんだ。

アナウンスによって試合が開始される。

私はすぐ後方へ下がり、後は――――



『決まりましたー！優勝は気合・努力・根性チームです！』

あれ？なんかあつという間だったな。

ユニコーンが飛び出して周囲から奇妙な目で見られたりしたけど：

『それでは、優勝した三人は地上へ降りてISを解除してください』

アナウンス通りに三人は地上へ降りてISを解除した。

そしてリフトによって三機のISが運ばれてきた。

そこにアイリスさんが直に三人の前に現れた。

アイリスさんはマイクを手に持ちながらこのISについて解説した。

『これは我が社が開発した汎用量産型試作IS「セルフファイター」です！』

そのISは右から赤、黄緑、空色と別々の色をしていた。

『若干の性能の違いですが、赤は移動、黄緑は射撃、空色は接近となっています。』

まだ試作段階ですので、実戦配置には至っておりませんが、性能は十分なモノです！』

自信があるのか、アイリスさんは得意げに言った。

『それでは、本大会はこれにて終了いたします。皆様ありがとうございました』

こうして、あっさりとこの大会は終了した。

三人組で挑戦する事と、そんなに参加人数がいなかったからかな？
ボクを徹底的に面倒を見るってのが条件だから企業に属してる人や
専用機持ちは無理らしい。



「それでは、私たちの勝利を記念して……乾杯！」

「「「かんぱーい！」」」

今ボク達は優勝した記念、という事でボク達の部屋でちょっとした
パーティーをしていた。

「これで翔くんと気軽に模擬戦ができるね」

「うんうん！ 私たちも頑張った甲斐があったってモンだよ」

と、いつもの調子で言った。

早苗お姉ちゃんの左手の人差し指には赤い宝石が埋め込まれている
指輪が光る。

「フフフ……専用機を持ったからには、もう天野くんには負けてら
れないね」

織香お姉さんは右耳に付いてる黄緑色のイヤリングを嬉しそうに触りながら言った。

「これからは二人も一緒に鍛えないか？有意義ではあると思うが…」

護さんは頭に付けている空色のハチマキを締めなおしながら言った。

「そうねえ、ご一緒してもいいかな？」

「うんうん、柔道はともかく基礎体力は必要だと思うからね。

……それにしても、護さんのその姿、あのアニメの主演にソックリだよ。

ちよつと空色っていうのが違うかな？」

「…早苗？もしかしてそれって、例の……」

「うんうん、中学でバレー部だった時に馬鹿やってたなあ…

あの時の早苗、私になんて言ったと思う？」

「えっ……あっ！か、翔くん！ケーキ食べる？確か甘いのが好きよね？」

唐突に織香お姉さんは話題を変えてきた。

織香お姉さんはシフォンケーキを持ってきた。

柔らかくて、甘くて、ボクの大好きなケーキの一つだ。

「うん！食べるっ！！」

ボクは思わず普通通りに反応しちゃった、けれども織香お姉さんは

怒らなかった。

「はい、あーん」

織香お姉さんは先端にケーキを刺したフォークをボクの口元に持ってきた。

「あーんっ♪」

ボクはそれをパクツと口に含んだ。甘くてもちもちとした感触がボクの頬を緩ませる。

「……なにこれ可愛いすぎる、お持ち帰りしたい、ガチで」

「やだ、鼻血が……」

「不覚、これトキメキという感情か……?」

……お姉さん方三名が鼻の辺りを手で隠しているけど、何かあったのかな？

第八話 改めてよろしくお願いします（後書き）

うん、特に面白みもない上にgdgdなんだ、すまない。

やけに原作キャラと距離感あるなーと自分でも思っているので、次から積極的に関わっていくと思います。

第九話 脅威のフラグ建築士・一夏

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。

織斑、オルコット、天野、吉良国、草薙。試しに飛んでみる」

もうすぐ四月が終わりそうな時期で、今日もボクは織斑先生の授業を受けていた。

今の授業は織斑先生が言ったとおりに、ISの基本的な飛行方法についてだ。

織斑先生に言われたとおりに、ボクは胸元にある待機状態のIS、電童を展開した。

一夏兄ちゃんもちょっと苦労しながらも専用IS、白式を展開する。

「よし、飛べ」

先生にそう言われて真っ先に飛んだのはオルコットさんだ、

その次に早苗お姉ちゃんと織香お姉さんがほぼ同時に飛んだ。

その姿を見てボクも後を追うように飛んだ。

一夏兄ちゃんは最後に飛んできた。

一夏兄ちゃんとオルコットさんが何か話している。オルコットさんは何だか嬉しそうだ。

「よし、五人とも急降下と完全停止をやってみせろ。目標は地表から十センチだ」

「了解です。では皆さん、お先に」

と言ってオルコットさんはすぐに地上に向かって行った。

そしてオルコットさんは完全停止を難なくやってのけたみたいだ。

「じゃ、次は私たちだね」

と、続くように早苗お姉ちゃんと織香お姉さんも地上へと落下していく。

そして二人も難なくクリアしていく。専用機を入手したばかりなのに、凄いなあ。

「一夏兄ちゃん、先行くね」

と、一夏兄ちゃんに断りを言っておき、ボクも地上へと移動した。地上がボクの目の前にどんどん近づいていって……

「ひゃっ…」

ボクは怖くなって途中で移動するのを止めて、地上に降りてしまった。

「何をしている、地表より二メートルは離れているぞ」

織斑先生が背後に鬼を見せるように迫って来た。正直に言えば怖い。

「あ…うう、その、地面が近づいてきたら、怖くなって……ごめんなさい」

ボクは頭を殴られると思って頭を抑えるように隠したけど、いつもやってる織斑先生のゲンコツは飛んでこなかった。

「いいか、専用機を持っている以上、地面に墜落するという事が少なからずともある。」

だから、今から訓練——」

織斑先生が話している途中で、突然空から何かが降ってきて、大きな衝撃と土埃が舞った。

多分、降って来た……いや、墜落したのは多分一夏兄ちゃんだろうけど、問題は……

「お姉ちゃん！」

一夏兄ちゃんの墜落してきた場所に早苗お姉ちゃんと織香お姉さんがいた事だ。

大きく開いたクレーターにボクは急いで向かって、土埃が晴れてボクが見たのは……

「……………」

一夏兄ちゃんが右手で早苗お姉ちゃんの胸を、左手で織香お姉ちゃんの胸を触れていた。

俗に言うラッキースケベをボクは目の前で見てしまった。

「……………」

「……………」

「あ……………」

一夏兄ちゃんもかなり気まずそうにしている。

むしろここで気まずくならない人はまずいないだろう、どんな人でも。

「フッフ、どうやら織斑くんは私たちの的になりたいみたいだね？
織香」

「わざわざ私たちと一緒にの地点に降りてこなくてもいいのにねえ？
早苗」

「あの、二人とも：目がヤバいんですけど」

確かに一夏兄ちゃんの言うように普段からは考えられないような目をしている。

そのまるで目の前で下着泥棒が盗む瞬間を実際に見た瞬間に自分の領土内だから、

自分の好きなようにメッタメタにしてやろうといったような。

そんな感じの雰囲気似ている、つまり獲物を狙ったライオンのような目をしている。

早苗お姉ちゃんが確か水城兄ちゃんと喧嘩してたときにそんな目をしていたような気がする。

「……何をしている？一夏」

そしてそのクレーターから見下ろすように鬼の幼馴染がいた。

「大丈夫ですか？一夏さ……」

一夏兄ちゃんの心配をしたオルコットさんがクレーターに駆けつけたけど、

やっぱりボクと同じようなりアクションをしていた。

「時に織香、今織斑くんが私の方が胸が小さいなと思っているように見えるのですが？」

「そうねえ早苗。まず織斑さんに手をどけてもらうように頼んだ方がいいんじゃない？」

「そうだねえ織香。でもその前に一発ぶちかましてでも許されるんじゃない？」

そう言って早苗お姉ちゃんはISの銃を展開した。
続いて織香お姉さんも同じ銃を展開する。

「やめろ、馬鹿者ども」

気がつけば織斑先生が二人の背後に立っていた。

「ひぎい！」

「うひゃあっ……」

「俺もっ!?!」

そして織斑先生は三人の頭を引っぱたいた。

「お前ら、武装を展開しろ。そのくらいはできるようになれ」

「は、はい…」

「…分かりました」

二人は頭が叩かれたのを不満に思いそうながらも返事をした。

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

と、織斑先生に言われて一夏兄ちゃんは武器を展開するように構えた。

そして手に光が集まり、その形は一夏兄ちゃんの唯一の武器、雪片式型を握っていた。

早苗お姉ちゃんは接近戦のサーベルを、織香お姉さんはハンドガンを展開していた。

「遅い。0，5秒で出せるようになれ」

しかし織斑先生は厳しい。まだまだ早く展開しろとの事だ。

「続いて天野、武装を展開してみろ」

「は、はいっ！」

ボクはいきなり指名されて、思わず驚くように返事をした。

そして電童の専用装備、データウエポンを呼び出す。

「ドラゴンドライブ、インストール」

そしてボクの左足にはドラゴンフレアが装備された。

しかし、織斑先生の反応は良くなかった。

「展開するのに叫ぶな。黙って装備しろ、もう一度だ」

ボクはドラゴンフレアを解除した。

そして織斑先生に言われたように黙って右腕に集中する。

(ユニコーン、お願い……！)

そして電童の右手にユニコーンドリルが装備される。

簞手の形をしたユニコーンの頭、そして一つの角がドリルとしての機能を持っていた。

「叫ばずに展開できるのなら最初からやれ、次はもっと素早くしろ。いいな」

やっぱり、織斑先生は厳しい。

「セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

続いてセシリアさんは武装を展開するポーズをとり、手にはライフルが持っていた。

あれを見てみると、ボク達の武装の展開は遅かったなと実感できた。

「さすがだな、代表候補生。——ただし、そのポーズはやめろ。

横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な――」

「直せ。いいな」

「――、……はい」

織斑先生に強く言われてセシリアさんは何だかしょんぼりとしていた。

いつも強気なオルコットさんだけど、流石に織斑先生にはあんな態度はとれないだろう。

むしろこの学園内でそんな行動を取れる人がいたら勇者だと思う。本物の魔王倒せるような。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

織斑先生は一夏兄ちゃんにそういった。

ボクは一夏兄ちゃんの手伝いをしようとしたけど、

お姉ちゃん二人に連れ去られて一夏兄ちゃんと会話する事ができなかった。

二人は笑顔だったけど、その顔にどこか腹黒いものを見たような気がするし……

……でもまあ、事故とは言えあんな事しちゃったし、自業自得ってことなのかな？



「……やれやれ」

私が吉良国と草薙と共に協力し、やっとの思いで専用機を得たというのに……
そこから私が織斑一夏とクラス代表戦で戦うと思った矢先の出来事なのに。

「……中国からの代表候補生、か……」

急な出来事だった。まさか転校して初日から喧嘩を売られるとは夢にも思っていなかった。

その理由がクラス代表を変わってほしい、との理由でだ。

転校生に聞いてみれば、織斑一夏関連の私怨という理由でだ。

私はその決闘を受け入れ、今は戦闘準備をしている所だ。
とは言っても、ただISスーツに着替えるだけなのだが。

「どれほどの実力なのだろうか……」

正直、私がクラス代表をするよりは、戦闘の経験が豊富な代表候補生に任せたほうが良い。

まだ戦闘経験もIS起動経験も初心者の私よりはまだ織斑に勝てるだろう。

普通に譲る、という考えは今の私には無い。この戦いでそれを見極めるためだ。

転校生が口先だけで実力が足りない愚か者でない事を祈るばかりだ。

「お手並み拝見、だな」



「さて翔くん、今日も訓練しようか」

いつもの通りに、ボクはお姉ちゃんと一緒にISの操縦訓練をするつもりだ。

お姉ちゃんも専用機を持ってるので、お互いにも訓練しすぎる事に悪い事は無い。

もう放課後の六時ごろで、ここまで学校に残って練習する生徒は少ない。

逆に言えばこの時間帯はISの操縦の訓練をし放題、という事だ。

「…あれ？誰か戦ってる。……護？」

アリーナの様子を見ると、どうやら護さんが誰かと戦っている。それが誰かはわからないが、赤いような桃色のような色のISと戦闘中だ。

護さんはセルフファイターの共通装備のサーベルと、護さんの接近戦型セルフファイター専用装備、

もう一本の刀、セイバーの二本を持ち、二刀流で戦っていた。

それに対して相手は二本の大剣を上下に合体させたような刀？をバトンのように操っている。

そして四本の刀はぶつかり合った瞬間に弾け、全ての刀は所有者の手から離れた。

こうなってしまうと、護さんは有利なのだろう。相手も他に装備が

無ければ、

素手となれば護さんはかなり強いから素手で勝負するとなると護さんが大方勝つだろう。

しかし、護さんのシールドがなんでか削られ、護さんのシールドエネルギーが0になっていた。

そしてピットに帰還する護さん、そこから出たら護さんと目が合った。

「…早苗に翔か、見てたのか？」

「うん、元々私たちはここで練習するつもりだったしね」

「そうか、ならば共に——」

「さあ護！これで約束どおりクラス代表を譲ってくれるわよね！」

と、誰かが割り込んで護さんの言ったことは最後まで聞こえなかった。

その割り込んできた相手は、ツインテールで比較的身長の小さい人だった。

「ああ、約束通りクラス代表を譲ろう。凰鈴音。

だが…私との約束も忘れないでもらいたいな」

「分かってるわよ。…悪いわね、無理にクラス代表を変わってもらって」

「何、気にするな。私は専用機を与えられて間もないし、私がクラス代表になっても負ける可能性があるしな…

…まあ、それを言うなら織斑もそうなるのだから」

ふと何気なく言った護さんの言葉にぴくつと反応する小さいツインテールの人。

「それでさあ護。約束なんだけど……」

「ああ、今日は転校してきたばかりだし、明日でも構わないだろう？」

「…そうね、お言葉に甘えさせてもらおうわ。じゃあね」

と、小さいツインテールの人はアリーナから出て行った。

「えーっと…今の小さいツインテールの人は誰？」

さっきまで黙っていた早苗お姉ちゃんが小さいツインテールの人について聞いていた。

護さんがさっき名前で呼んでいたような気がする…
たしか中国人みたいな名前じゃなかったっけかな？

「ああ…彼女は中国から転校してきた代表候補生らしい。…明日になれば分かると思うぞ」

と、護さんは少し困ったような様子だった。

「まあ、本音は良い奴だと思うぞ。クラス代表が変わるだなんて無茶を言ったのは

私怨のようなものだと思うがな…まさか凰まであの…

…ああ、すまない。このアリーナを使用するのだったな…

私は戦闘で疲れたから休ませてもらおう…」

と、疲れそうな表情と態度をとりながら護さんはアリーナを出て行った。

「……………」

早苗お姉ちゃんはなんだか気難しい表情をして護さんの後姿を見ていた。

けれどもすぐにいつもの早苗お姉ちゃん表情に戻っていた、

「じゃ、翔くん。いつもの訓練の前にいっちょ模擬戦してみよっか！私も専用機を手に入れたんだし、一回はやってみたいよね」

と、早苗お姉ちゃんはISを展開して我先にと空を飛んだ。

ボクもそれに続いて電童を展開し、宙に舞った。

早苗お姉ちゃんは射撃特化型のセルフファイター専用装備である長距離射撃ライフルを構えた。

ボクもそれに合わせてドラゴンフレアを左足に装着する。

装着されたドラゴンフレアは体が丸くなり左足のタービンの回転と連動し、

それを回転させる事によって強力なファイナルアタックを使用する事ができる。

最もドラゴンフレアを選んだ理由は遠くから攻撃できるってだけだけど：

「さあ、まずは戦闘！やってみますかっ！」

と、言った直後に早苗お姉ちゃんは銃で撃ってきて、その攻撃に直撃した。

電童のISのシールドエネルギーはごっそりと削られてしまった。

「あっずるいよー…」

「こういうのは言ったもの勝ちだし」

すぐにその場から動いてドラゴンフレアの能力であり、現在使用できる唯一の射撃武器、クラッシュレイで早苗お姉ちゃんを狙うけども、

お姉ちゃんは素早く動いてこっちの攻撃は一度も当たらなかった。

「いいかい、翔くん。射撃武器を使うに当たって重要な事は……」

お姉ちゃんはボクに銃口を向けた。

ボクは攻撃を避けるために素早く右下に避けようとした。

「勘だよ」

次の瞬間、早苗お姉ちゃんの攻撃がボクに直撃した。

第十話 織香お姉さん活躍の巻…かな？

「おはよー、一夏兄ちゃん」

「おはよう、翔」

すぐそこで一夏兄ちゃんと出会って一緒に歩いていた。

近くにいるお姉さん達が少し顔を赤くしてたけど、大丈夫だろうか？

「なあ翔。まだ二人の…ええっと」

「早苗お姉ちゃんと織香お姉さん？」

「そう、その二人の事だけど…まだ怒ってた？」

一夏兄ちゃんはこの前落下した時に二人のお姉ちゃんに対して
事故で不可抗力だけでもHな事をしちゃった時から気にしてたみたい。
い。

お姉ちゃん達はあんまり一夏兄ちゃんの事を喋らないから、
まだ怒っているかどうかは確実には分からない、けれども……

「うーん、詳しい事は何も言ってなかったけれども…多分、もう怒
ってないと思うよ？」

「そうなのか？」

「…多分」

言った言葉に自信は無い。

それからちよつと歩いて教室の扉を一夏兄ちゃんが開く。
クラスの中の皆は扉の音に気づいてこつちを向く、この瞬間がどう
してもなれない。

次々とクラスのお姉さん達がボク達に朝の挨拶を交わし、
その中で一人のお姉さんがボク達に話しかけてきた。

「おはよー天野くん。ねえねえ、転校生の噂聞いた？」

話題のその転校生ってもしかして：昨日護さんが戦っていた相手な
のかな？

ちらり、と視線を席に座っている早苗お姉ちゃんにずらした。

お姉ちゃんはボクの視線に気づいてボクを見たけれども、
少しだけ顔をニヤけた後に視線をそらした。

「転校生？今の時期に？」

一夏兄ちゃんはちよつと不思議そうに言った。

「そう、何でも中国の代表候補生なんですって」

「ふーん」

さりげなく織香お姉ちゃんが一夏兄ちゃんに助言する。

と言うか、もしかして転校生の事を言いふらしたのってまさか：早
苗お姉ちゃん？

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら？」

このクラスの代表候補生、オルコットさんはいつも通りの平常運行
だ。

いつものように腰に手を当てるポーズが様になっているように見える。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐほどのことでもあるまい」

ふと気づけば側に篠ノ之さんが立っていて、一夏兄ちゃんに話しかけてきた。

……それにしても、喋り方が護さんとそっくりだ。

「どんなやつなんだろうな？」

一夏兄ちゃんはその転校生に興味？を持っているみたいだ。
ボクはその外見を知っているから何か言えることは無いけど……

「む…気になるのか？」

篠ノ之さんが一夏兄ちゃんに聞いてくる。

「ん？ああ、少しは」

「ふん……」

すると篠ノ之さんはなんだか機嫌が悪くなったように見えた。

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？
来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「そう！そうですわ、一夏さん。クラス代表戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう。」

なにせ、このクラスの中で代表候補生なのはわたくしだけです
ら」

オルコットさんはやけに代表候補生という事を主張するように言っ
た。

「まあ、やれるだけやってみるか」

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきません
と！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

「…うん、ボクも一夏兄ちゃんにはぜひとも優勝してほしいな」

このクラス代表戦で優勝したクラスには、学食デザートの半年フリ
ーパスが配られる。

…この学食はとても美味しくて甘いものも凄くおいしい。
でも普通に頼むと高いし、半年も無料になるのはとても嬉しい。
だからぜひとも一夏兄ちゃんに優勝してもらいたい。

「今のところ専用機を持っているのは1組と2組と4組、
しかも4組はまだ未完成らしいし、2組は専用機を与えられたば
かり。

勝機なら十分あるわよ、織斑くん！」

と、クラスのお姉さんが解説してくれた、とてもありがたい。

「――その情報、古いよ」

と、今の空気を壊すかのように誰かが教室の入り口から誰かが話しかけてきた。

「二組は代表候補生がクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

腕を組んで片膝を立ててドアに立っていた人は：

やっぱり昨日護さんが戦っていたツインテールの小さい人だった。

「鈴……？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、ファン・リンイン 鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

「何格好付けてるんだ？ すごい似合わないぞ」

「んなっ……！？なんてことを言うのよ、アンタは！」

：あれ？もしかして一夏兄ちゃんはこの人の事を知ってるのかな？
もしかすると、奇跡的に何年かぶりに出会ったとかそういうものかな？

「時に翔くん。リーダーにあるべきに能力とは何か知ってるかい？」

早苗お姉ちゃんがいきなり隣からがしてビックリした。
というか、いつの間に隣にいたのかな？

「人の上に立つのに必要なのは人を纏めるカリスマ性、
だけど野生ではそれ以上に危険を察知する事も重要になる」

と、早苗お姉ちゃんはあの小さいツインテールの人の後ろを指差した。

早苗お姉ちゃんが指していた人物は……

「おい」

「なによ!？」

あの小さい人は織斑先生の手に持っていた出席簿で思いっきり殴られた。

バシンッ!と痛そうな音が教室に響いた。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口をふさぐな。邪魔だ」

「す、すみません……」

小さい人はすぐごとドアから離れていく。

なんだか織斑先生に対して苦手な意識を持っているように見える。

「さて、そろそろ席に座りましょうか」

「言われなくても、すたこらさっさだぜえ」

と、早苗お姉ちゃんと織香お姉さんは自分の席に座っていく。

多分、このまま突っ立っていると織斑先生に叩かれちゃうかもしれ

ないからね。

「またあとで来るからね！逃げないでよ、一夏！」

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

小さい人は二組へ凄い勢いで走って帰って行った。

その後、二人が一夏兄ちゃんにあの人が知り合いかどうかを聞いていたら、

織斑先生に頭を叩かれた…早苗お姉ちゃんがいなかったらボクも叩かれてたのかな…？



転校生が一夏兄ちゃんと関わりが判明してドタドタと騒がしかった学校も、

放課後の5時頃になればその騒がしさも薄れ、朝に比べると静かになっていった。

しかし、あの三人がいる場所はどこでも騒がしくなっちゃうわけで……

今回は織香お姉さんと一緒に第三アリーナでISの訓練をする予定だった、

けれどもそこには一夏兄ちゃん、篠ノ之さん、オルコットさんの姿があった。

「あ、貴方達、どうしてここにいますの!？」

オルコットさんはボク達と篠ノ之さんがいる事に驚いている。

ボク達は偶然だけれども、篠ノ之さんは多分一夏兄ちゃんを待っていたんだろう。

「私は元々、一夏に頼まれていたからだ」

と、篠ノ之さんは答える。たしかISの訓練を全くしないで剣道ばかりやってたんだっけ。

「私たちは偶然、ここで訓練をしようと思ってたからですよ」

と、織香お姉さんはオルコットさんと一夏兄ちゃんに言う。

「丁度よかった。ちょっと二人とお話したいのだけれども…良いかしら？」

織香お姉さんは篠ノ之さんとオルコットさんに話がしたいと言った。そこで織香お姉さんは二人の耳元で何かを言っていると、二人は顔を真っ赤にした。

「二人とも、顔が赤くなってるけど大丈夫か？」

一夏兄ちゃんは二人を心配するが、二人の反応は何だかおかしかった。

「な、なななな、何でもないぞ、一夏！」

「そ、そうですわ！何でもありませんのよ、ホホホ……」

「織斑くん、ちょっと三人で話したい事があるから…

そうね、時間が掛かると思うし、翔くんと一緒に訓練してくれないかしら？」

「ああ、分かったよ。俺も決着を付けたいと思っていた所だし」

一夏兄ちゃんはやる気満々だ。この前クラス代表を決定させる時に戦ったが、

結果は引き分け。勝敗がつかないでいたから勝てないにしろいい所までは行くと考えていた。

「じゃあやろう、一夏兄ちゃん！」

「おう！望むところだ！！」

とボクと一夏兄ちゃんは専用ISの白式と電童を展開してアリーナ内へと移動した。



「それで…さっきも言ったとおりだけど、二人とも織斑くんの事が好きなんですよ？」

すると二人は顔を赤くして遠まわしに弁解をしていた。

そんなのだから鈍感な織斑くんは二人の行動を理解してもらえないのよ、恐らく。

「そ、それにしても、私が何故…い、一夏の事が好きだとわかったんだ？」

「そうですわ！私も誰に対しても…い、一夏さんに対して…」

その、こ、好意を抱いているとは…誰にも言ってませんのに…
…」

「…二人とも、もしかして織斑くんの事が好きだと気づかれていないと思った？」

「ああ」

「はい」

二人はどっちも好きだという事はバレてないと思っているみたい。
態度や行動からして最低でも既にクラス中には伝わっているのにな。
…好きだと知ってバラしたのは早苗のせいなんだけどね。

「それで、モノは相談なんだけれども…」

これからたまーにでいいから翔くんとも模擬戦をしてほしいのよ」

「…それとさっきの会話と何が関係あるんだ？」

「もし協力するって言うてくれるなら、私は織斑くんを二人に意識させるように手伝うわよ？」

「きよ、協力しますわ！」

「う、うむ：それじゃあ私も協力しよう」

セシリアさんは即答で協力してくれた。

それに負けないように箒さんも協力してくれると言った。

「フッフ、それじゃあよろしくね」

とりあえず、今日はこれで大丈夫だ。

たまに翔くんは織斑くん、セシリアさんと箒さんと模擬戦をしてくれるようにしてくれたし、

今現在織斑くんと翔くんが模擬戦の真っ最中だ。

多分、私が早苗なら真っ黒いノートを開いて、悪い顔でこう言うんでしょね。

計 画 通 り っ て ね。

むしろここからが大変ね、織斑くんは恋愛に対して鈍感な気がしてならない。

なんとなくそれが分かるのはきっと私が水城の事を知っているからだと思う。

私はアリーナ内で二人が戦っている様子を見してみる。

翔くんは武装、データウェポンを使わずに素手で戦っているようだ。それに対して織斑くんはやっぱり一つしかない武装で頑張っている……あら？ なんだか翔くんのISの調子がおかしいように見えるけど……



「……っ!？」

ドラゴンフレアのファイナルアタックを発動しよとした瞬間、何故かボクのISが浮かばなくなり、ゆっくりと落下した。幸いにも地面に近い位置だったから落下する事故なんてのが起こらずにすんだ。

「えっ、何で、どうして？」

もしかすると、電童が壊れちゃったんじゃないかって思うと涙が出そうになった。けれどもそんな事は考えないで涙を出さないように頑張った。

「翔! 大丈夫か!？」

一夏兄ちゃんが心配してボクの側に駆け寄ってくる。

「ボクは大丈夫だけど、電童が……」

ボクは電童を待機状態にする。すると元通りに歯車のアクセサリ―に戻った。

どこにも悪いところは無いうんだけれども……このままボクはアリーナを出て、織香お姉さんにこの事を話した。

「：とりあえず、見てみないとわからないわ。このまま点検ついでに見てみましょうか。」

アイリスさんから電童とセルフライター修理方法教えて貰ったばっかりだしね。

ここじゃわからないし、IS整備室へ行きましょうか」

織香お姉さんはボクの手を握ってIS整備室へ行こうとした。けれども、それを篠ノ之さんとオルコットさんが引き止めた。

「ちょっと待て草薙！さっきの：と、取引はどうした！」

「そうですわ！このまま何もせずに居なくなるのは反則ではなくって！？」

二人が何か：契約違反だとも言っているのかな？
ボクにはどういう意味かわからないけれども……

「ふふふ、そうかもね。でも私の優先は翔くんで、貴女達は織斑くんを優先するんでしょう？」

それに堂々と言ったら駄目なものなのよ、ばれないで自然に言わなきゃいけないのよ。

ところで：今織斑くんが暇になってそうなんだけれども、

二人とも訓練を手伝わなくていいのかなあ？
箒さんは折角打鉄の使用許可が出たのに」

ここで二人ははっとして一夏兄ちゃんに近づいて訓練すると言っていた。

でも、織香お姉さんが何を言っているのかよくわからなかった。
何を言っていたのか聞いてみると、適当にはぐらかされて答えてく

れなかった。

早苗お姉ちゃんや護さんに聞けば何かわかるかな……？

「それじゃ、ISの整備をしに行きましようか」

今ボクは織香お姉さんと一緒にIS整備室へ向けて歩いていた。

本当は二年生から使用できる施設だけれど、専用機を持っているなら話は別らしい。

「あゝ、あまのんだゝ」

歩いている途中で布仏のほとけ 本音、ほんちゃんに出会った。

理由は分からないけど、自分の手より長い袖の制服を着ていて、独特の雰囲気がい人だ。

「あつ、ほんちゃん。どうしたのゝ？」

ボクはクラスどころか学年全体を見渡しても同じ年齢の人は居ない。だから皆年上だからどうしても敬語を使っちゃ癖がある。

一夏兄ちゃんとは男同士つてのがあるけど、ほんちゃんに対してそれとは別。

話しかけやすいし、行動や雰囲気がおりちゃん、幼馴染の草薙織子と凄く似てる。

おりちゃんとは昔からすばと一緒に遊んでいたし、何より親しみやすかった。

「えゝつとねゝ、暇だから生徒会室へ行こうとしたんだけどゝ

あまのんはゝこれからどこへいくのゝ？」

「ボクはこれからISの点検や整備を教えってもらうから整備室へ行

くんだけれども…

……ほんちゃん、生徒会室へ行って何をするの？部活関連の話とか？」

「私ねーこう見えても生徒会の役員なんだよー」

えっへん、と胸を張るほんちゃん。

ほんちゃんは生徒会に入ってるんだ、凄いなー。

生徒会ってボクの中では凄い人が何か会議とかやってるその横で織香お姉さんがぽかんとしていた。

「…織子？」

おりちゃんを知ってるなら誰もがこう言うと思う。

顔や身長は似てないけれども、行動や雰囲気が本当にそっくりなんだ。

「ううん、私は本音だよー」

ほんちゃんは織香お姉さんにおりちゃんと思われたと勘違いしたみたいで、

改めてほんちゃんは自己紹介をした。多分知ってるけど。

「整備室へいくなら私も行くよー」

長い袖をぶんぶんと振り回して自分も行くアピールするほんちゃん。

なんだかその長い袖がほんちゃんのアピールしている。

「なら、一緒に行きましょうか」

「お」

ほんちゃんはボクらと一緒に整備室へと行くことになった。



「それじゃあ、私の方も終わったら手伝うからね」

ほんちゃんは別の誰かのISの整備をしに行って、結局はボクと織香お姉さんと二人でISの整備をする事になった。途中までは二人で一緒にやってたけれども、途中から織香お姉さんが。

「…うーん、複雑ねえ…一人じゃあ難しいし、早苗や護さんも呼びましょうか」

と言って携帯電話を使って早苗お姉ちゃんに連絡をした。

「早苗、いる？」

『どうしたん？ 織香、携帯からバルカンヘッダー出なくなった？』

「いつから私の携帯はレオンセルラーになったのよ……」

『それで、用件は何？』

「翔くんのISの調子がおかしいのよ…一緒に診てくれない？」

『分かった40秒で支度する！んじゃ！』

「ちょっ…早苗、まだ…切れちゃった」

早苗お姉ちゃんは織香お姉さんの返答も聞かずに電話を切った。

「では私の準備プロセスをもう一度見てみよう！」

IS整備室の扉を乱暴に開けてお姉ちゃんが叫ぶように言った。

扉を乱暴に開けて、と言ったけど整備室の扉は自動ドアなんだから
ども……

「お姉ちゃん、今のギャバンだよね？」

「今度戦隊モノとコラボしますよねー。」

さて、翔くんのISの調子が悪いんだよね。ちょっくら見てみま
すか」

そう言って早苗お姉ちゃんと織香お姉さんは電童を診ている。

今ボクが何もできないのがちょっと悔しい…何かできる事があれば
いいのに……

「あー、駄目だ。私にもわからん」

「…こうなったら、最後の手段ね」

と言って織香お姉さんは携帯電話を使って誰かと連絡する。

「もしもし、織香ですが……」

『あら、織香ちゃん。どうかしたの?』

「アイリスさん? ちょっと電童の事で聞きたい事が……」

織香お姉さんはアイリスさんに電話で連絡をし、電童について聞き始めた。

その内容を見てみると専門用語や変な機器の名前が一杯出て何かなんだか分からなかった。

一通り会話が終わると、織香お姉さんがどうして調子が悪くなったのかを説明してくれた。

「翔くんが使っている電童なんだけれどね、本当は両手足の装備のみだったけれど…

一次移行をした時に胴体部分に装甲が追加されたよね? これなんだけれども」

と、織香お姉さんは電童の背中に装着されている部分を指す。

「これは電童がデータウェポンに合わせて進化した部分らしいのだけれど、

ファイナルアタックを使用する時は背中はこの部分を空けてからやるんだって」

織香お姉さんは電童の中を弄ってバックパックの上部分を展開させた。

「こうしないと中で熱が溜まってさっきみたいに動かなくなるみたい。」

でも機械の故障とかじゃないから放っておいても大丈夫だって」

織香お姉さんは電童を待機状態にして、ボクに手渡した。

ボクは待機状態になっている歯車のアクセサリを首にかけた。

そのままボクは電童を抱きしめるようにぎゅっと握り締めて安心した。

「よかった、壊れてなくて……」

心の底から安心した。ボクにとってなぜか電童は相棒というよりも……上手に表現できないけど、ずっと電童のような存在を待っていた気がする……

「ありがとう、お姉ちゃん！」

ボクは織香お姉さんにお礼を言った。

あのままだと壊れたままだと思っていたし、解決方法も見当たらなかった。

それにあのまま放っておいても直ってたけれども、同じ事を繰り返してた。

その度に壊れたんじゃないかと思うと気が気じゃなかったかもしれない。

「いいのよ、これから私たちは自分たちのISの点検をするから……今日の訓練はこれでお仕舞いね。織斑くんと一緒に訓練してみたらどうかかな？」

「うん！それじゃあね！」

「ちなみに、私が来た意味は？」

「私のIS整備手伝ってね」

早苗お姉ちゃんは見事に織香お姉さんに釣られた…のかな？

ボクはさっき途中で終わってしまった一夏兄ちゃんと模擬戦をするのにアリーナへと向かう。

その足取りは電童が壊れたかもしれない不安を持ってIS整備室へ行くよりも遥かに軽かった。

しかし、アリーナに行ったら行ったで篠ノ之さんとオルコットさんに怒られ、

二対二の模擬戦を提案すると、メンバー決めでゴチャゴチャになり、結局訓練らしい訓練はする事ができなかった。

そして後日……クラス対抗戦の日程表が張り出された。

第一回戦は…一組対二組、因縁の対決？で始まる事になった。

第十話 織香お姉さん活躍の巻…かな？（後書き）

整備室に入ったら特撮ネタが出たのは…お察してください。

モロ書くのはマズくて○で隠したりした方がいいのなら修正します。

第十一話 クラス対抗戦・一組VS二組！

今日も不思議な夢を見た。

しかし、普段のように自分で言葉を思い出すような夢ではなかった。誰もが見る、普通で平凡な夢と同じだった。

ボクは赤ちゃんになっていて、ベビーベッドで指を咥えながら寝ていた。

ボクの目の前にはボクのお母さんと思われる人物がボクの顔を覗いていた。

顔は真っ黒で何も見えなかったが、ただなんとなくお母さんだと認識する事は出来た。

お母さんと思う人物はボクにお休み、と一言だけ言うと言界から去っていった。

ボクは目の前に見える天井に付いているグルグルと回っている玩具を見ていた。

……この夢がボクの過去なら、一つだけ理解できない部分がある。ボクの隣にいる、手足をバタバタしているこの赤ちゃんは……

——誰？



「翔、起きろ」

護さんに掛け布団を奪われて、無理矢理に起こされる。
二度寝したい衝動に駆られるが、二度寝するとそれはそれで地獄が待っている気がするので、
眠い体を無理矢理起こして体を思いっきりピンツと伸ばした。

「おはよ…護さん…」

眠そうな声で護さんに朝の挨拶をする。

「おはよう、翔」

護さんはボクに挨拶を交わした。
そしてパジャマからジャージに着替え、準備をする。

「よし、行くぞ」

いつものように護さんと、途中で早苗お姉ちゃんと織香お姉さんと合流して、

一緒に自身の体を鍛える事になった。

ISがいかにかに万能でも、扱う本人の技量にも左右されるからね。

「あの、護さん……来週のクラス代表戦、どっちが勝つと思います？」

グラウンドの半周を終え、休憩している途中で護さんに聞いてみた。ボクとしては、自分のクラス代表である一夏兄ちゃんに是非とも勝ってほしいけれども……

技量としては、多分小さい人……凰さんの方が上手だろう。

「恐らく、凰が勝つと私は思うな」

護さんはそう答えた。きっと誰もがそう答えると思う……

クラス代表を決める時に代表候補生のオルコットさんを一回は倒していたんだし……

でも相手の性能がわからないから倒せるかどうかも分からない相手に対して、

果たして一夏兄ちゃんはどうやって倒そうとするのかな……？



私たちは翔くんと早苗と一緒に訓練しようとしたらまた織斑くん達とまたバツタリ出会った。

翔くんと織斑くんは羨ましいくらい仲が良い。男同士ってそんなに良いものなのか…許せん。

箒とセシリアは織斑くんの訓練方法で言い争っている、お前ら少しは譲り合えよ。

「一夏兄ちゃん、きっと勝てるよね？」

「ああ、大丈夫。絶対に勝ってくるから」

織斑くんは翔くんの頭を撫でた。畜生、それは私の役目だ、役割を奪うんじゃない。

翔くんはえへへ…と嬉しそうな表情をしてぽっと頬を赤らめた。マジ可愛い。

「…どうしてまた貴女方がいらっしゃいますの？」

セシリアさんがマジ切れる五秒前だ、理由は織斑くん関連なのだろうけど。

ぶっちゃけ偶然、翔くんはアンタラ程べっとりじゃないし、第一抱いてる感情が違うし…

「待っていたわよ、一夏！」

織斑くんが翔くんの頭をナデナデし終え、ピットに到着すると、誰か知らない空気の読めそうにない声がピットに響いた。

そこには噂の転校生、凰鈴音がいた。最初文字見るとふーりんねって読むのかと思ったよ。

しかし予想外ながら、腕を組みながら立っていた凰鈴ちゃんの後ろ

に護がいた。

風鈴娘の後ろで腕を組んでククク：私が真のラスボスだ、と言わん
オーラを持っている。

「あれ、どうしたの護？その小さいの舎弟にしたの？」

「誰が小さいのよ！それに舎弟じゃなくて私が師匠よ！」

護に聞いたのに風鈴小娘がツンとした態度で反応した。ツンデレか
コイツ。

「舎弟とか師匠かは別として：実際私は凰に色々と教えてもらった」

「そうなんだ、ありがとな。鈴と仲良くなってくれて。えっと……」

織斑くんが護さ笑顔で風鈴娘と仲良くなった事に感謝をした。
つつーかせて専用機持つてる人物名くらい覚えてなさいよ。

「……余計なお世話なのよ、バカ：／／／」

そこで何でお前がデレるんだ風鈴小娘。小声で言っても聞こえてる
ぞ。

それに気づかない織斑くんも織斑くんだが。

「出雲だ」

「ありがとう、出雲さん」

「ねえ織斑くん。これから訓練しようって言うのにレディを放って
いいのかな？」

織斑くんはそうだった…と思っているような表情をしている。

っつーか織斑表情に出すぎだろ、心を読む妖怪は知ってるが心を読む妖怪は初めてだ。

いや、人間なんですけどね。

仕方が無いから助け船を出してやるか。

「そうそう、折角だから皆で大乱……」

「あーっ、もう！話が進まないじゃない！部外者は引っ込んでなさいよ！」

私の助け船が貧乳風鈴小娘に邪魔された。畜生、何だってんだ。

「部外者は貴様の事だろう！」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ！」

「あたしは関係者よ、一夏関係者。だから問題無しね」

それを言ったら私はともかく翔くんも関係者のような気がするけど…翔くんは織斑くんの側で風鈴の出す雰囲気には怯えている。風鈴自重しやがれ。

それから始まったのは織斑くんと風鈴の痴話喧嘩、てか風鈴もハーレム要因なのか…

まあ喧嘩の原因は織斑くんの天然系鈍感兼朴念仁な部分が働いて悪い方向に行ったんだろう。

来週のクラス対抗戦で勝ったら命令を聞くという話になった。まあお前なら分かるよね？

「誰がやめるのよ！あんたこそ、あたしに謝る練習をしときなさい

よ！」

「なんでだよ、馬鹿」

「馬鹿とは何よ馬鹿とは！この朴念仁！間抜け！アホ！馬鹿はアンタよ！」

ここで織斑くん、マジ切れしたのか全人類の女性を敵に回す。

つつーか朴念仁って言葉を知らんのか織斑くんは。気になる単語が出たら辞書を引けよ。

「うるさい、貧乳」

バカが言った瞬間に風鈴はISを部分展開し、バカの顔の隣を殴った。

ほんの少しだけグラグラと、ピットの中が揺れる程の破壊力で殴ってた。

「言ったわね……言っではならない事を言ったわね！！」

風鈴はバカの顔の隣に出来たクレーターから腕を引っ張る。

「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった。すまん」

バカは自分が言い過ぎたと自覚してるのか風鈴に謝る。しかし風鈴は聞こうともしない。

「今の『は』！？今の『も』よ！いつだってアンタが悪いのよ！」

風鈴小娘のトンデモ理論である。バカは焦ってるのか何も言わない。

「ちょっとは手加減してあげようかと思ったけど、どうやら死にたいらしいわね……

いいわよ、希望通りにしてあげる。――全力で叩きのめしてあげる」

風鈴は明らかにブチ切れてる表情を作ってバカを睨み、ピットから出て行った。

バカは明らかに言いすぎたって感じを出してるし、翔くんはオドオドしてる。

うむ、風鈴がブチ切れて翔くんがビクビクしてるみたい。心のケアは任せろー。

「い、一夏兄ちゃん…あの、えっと、仲直りできるよ……」

翔くんはバカを励ましている、健気で可愛い。

「ありがとな、翔……」

バカはまた翔くんの頭を撫でた。ここで八つ当たりしてたらその存在を滅ぼしていた所だ。

翔くんの尊大な心に感謝するがいい、バカめ。思う存分翔くんを癒されるがいい。

……ただ、バカに頭を撫でられる翔くんを睨む箒さんとセシリアさん。

風鈴の一件で怯えているのにこれ以上ビビらせるような真似はしないで、マジで。



今日は凰さんが一夏兄ちゃんに怒ったりしたハプニングがあったけど、

とりあえずボク達は別のアリーナで訓練をする事にした。
護さんがISの訓練に來なかつたのは凰さんに教えてもらつてたかららしい。

「ねえ、早苗お姉ちゃん……」

「どした？翔くん」

早苗お姉ちゃんはボクの頭をナデナデしながら聞いてくる。
怒られるかもしれないけど、さっき意味がわからない単語があつた。
でも言つた瞬間にスッゴク怒られるかもしれない……

「あの、あの時一夏兄ちゃんが言つてた……ひにゆうん？」

その一言で凰さんが思いつきり怒るんだから、皆怒つちゃうかもしれない。

でも、早苗お姉ちゃんも織香お姉さんも護さんも怒らなかつた。
それどころか護さんはため息をついて呆れているように見えた。

「翔くん、貧乳っていうのはね……早苗の事を言うのよ」

織香お姉さんが言った瞬間に早苗お姉ちゃんはISを展開して織香お姉さんを殴った。

けれども織香お姉さんもISを展開し、早苗お姉ちゃんの攻撃を受け止める。

そのまま続けて早苗お姉ちゃんはパンチを連続して出し、それを織香お姉さんは受け止めた。

ISを展開しているせいなのか、殴っている腕と受け止めている腕の残像がいくつも見えた。

「突き（ラッシュ）の速さ比べか……」

護さんは二人の行動を見て、その感想？を述べた。

これから絶対女の子の前では貧乳とは言わない、言ったら命は無い。心からそう思った。



試合当日、ボク達は篠ノ之さんとオルコットさんと先生方と一緒に、ピットで試合を見れる事になった。

「凰さんの専用機……こうりゅう？」

「違う、甲龍と書いてシェンロンと読むそうだ」

「神龍？」

「七つのボール集めたら現れる神じゃないのよ？……まあ私も思ったけど」

「ボクも……」

「私としては文字の最初に鉄を付ければ最強に……」

「天が無ければ役に立つまいが……！」

時々早苗お姉ちゃんと織香お姉さんのネタが分からない時がある。ちなみにこの時のネタは冥王が天以外の八卦をボコボコにする漫画らしい。

「漫才はそこまでしておけ、試合が始まるぞ」

織斑先生の厳しそうな言葉でボク達はパツと会話を止めて、アリーナ内部を映すリアルタイムモニターに視線を移動させた。

凰さんのいIS『甲龍』^{シェンロン}はオルコットさんのブルー・ティアーズと同じく、

両肩にぷかぷかと浮かんでいる装備が見える。

それにはトゲトゲした装甲が装備されていて、あれに当たるとすごく痛そうに見える。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

二人はアナウンス通りに規定された位置まで移動する。そして……

試合開始のブザーが鳴り響き、その音が終わると同時に一夏兄ちゃんは凰さんに切りかかり、

凰さんはそれを大きい青竜刀…とはとても言えない。斬馬刀を魔改造したようなモノを

取ってに二本くっ付け、軽々と扱って一夏兄ちゃんの攻撃を防いだ。バトンのように青龍刀を振り回す、一夏兄ちゃんはそれを防ぐのに精一杯みたいだ。

一旦距離を取ろうとしたのか、一夏兄ちゃんは凰さんから離れようとした。

けれども凰さんの浮いている両肩の部分の装甲が開き、その姿を露出させた球体は

光を放つと同時に一夏兄ちゃんは『吹き飛ばされた』。

一夏兄ちゃんは体勢を立て直した瞬間にもう一度吹き飛ばされた。

「なんだあれは……？」

篠ノ之さんは凰さんの放つ正体不明の攻撃に疑問を抱いていた。

その疑問に答えたのは同じ二組で、一度戦った事のある護さんだった。

「あれは甲龍の第三世代型の兵器『衝撃砲』。

空間を圧縮し、それ自体を砲弾として打ち出す『砲身も砲弾も見えない兵器』だ…」

あの時護さんが何も撃墜されたのはこの衝撃砲の攻撃だったんだ……だからあの時護さんのISのシールドエネルギーが削られていたんだ。

篠ノ之さんは一夏兄ちゃんが心配なのか、不安そうな感じが漂っている。

衝撃砲を喰らった後、一夏兄ちゃんは白式の唯一の武器、雪片式型

をグッと握り締める。

そして覚悟を決めたのか、キッと凰さんを真剣に睨みつけた。
普段見せない表情に凰さんは驚いたのか少し動作がぎこちない気がしたが、

青龍刀をクルクルと振り体勢を立て直した。

その一瞬——ボクは一夏兄ちゃんが瞬時加速を使って凰さんの倒そうとした……

けれどもその刃は凰さんの寸前で止まる事になった。

突然の爆発音、同時にアリーナ内に土煙が舞った。

「え……？」

突然の出来事にボクの頭は処理が追いついていなかった。

アリーナ内の煙が晴れると、そこには……

黒に限りなく近い灰色をした『全身装甲^{フル・スキン}』のISがそこにいた。

第十二話 乱入者との決着

一夏兄ちゃんと凰さんとの戦闘の途中に現れた謎の全身装甲のIS。突然の出来事で頭が考えるのをやめて、しばらくぼかんとしていた。

「翔？大丈夫か？」

護さんにボクの名前を呼ばれるまで、何分も何時間もあったように感じた。

「あ…だ、大丈夫です」

ボクは護さんに大丈夫だと言う。

でも本当は少し頭がクラクラするけど、ここで無駄に心配をかけさせるわけにはいかない。

全身装甲のISはアリーナのシールドを破り、無理矢理進入してきた。

アリーナのシールドも通常のISと同じ防御力を持ち、それを破るとなると……

一夏兄ちゃんと凰さんは危険……？

「織斑くん！凰さん！今すぐアリーナから脱出してください！

すぐに先生たちがISで制圧しに行きます！」

山田先生は一夏兄ちゃんと凰さんにアリーナから出るように命じた。けれども、一夏兄ちゃんの返事はアリーナ内で戦うと言った。

——どうして？死んじゃうかもしれないのに、どうして戦うの？

「織斑くん！？だ、ダメですよ！生徒さんにもしものことがあった

ら――

「もしもし！？織斑くん聞いてます！？凰さんも！聞いてますー！？」

連絡が出来なくなっても山田先生は一夏兄ちゃんと凰さんに呼びかける。

けれども二人の反応は無かったみたいで……

「本人たちがやると言っているのだから、やらせてみもいいだろう」

「お、お、織斑先生！何をのんきなことを言っているんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

「…昔の私なら織斑先生に対して『弟さんが危険なのになんてのんきな態度なんだ』

なんて言って突っ掛かっていたんだろう……」

早苗お姉ちゃんのいつものネタが始まる。

「ほう、そうなのか？」

「いつものボケですよ、織斑先生」

早苗お姉ちゃんと織香お姉さんは非常事態でも平常運転だ。

「織斑先生、コーヒーに入れたの……粉ミルクだぜ」

心なしかコーヒーを飲み干した織斑先生の手は震えているように見

えた。

「なぜ粉ミルクがあるんだ。また吉良国か？」

「こんな状況を予想して粉ミルクを用意する高等技術私は持ってませんよ……」

早苗お姉ちゃんは珍しく呆れた表情と行動を見せた。

普段は逆で呆れさせるのに……それほどまでに粉ミルクの存在は謎だった。

「先生！わたくしにIS使用許可を！すぐに出撃できますわ！」

「そうしたいところだが、これを見ろ」

織斑先生は手に持っていたiPad見たいなものを使って、ボク達に見せたISアリーナの状況を見せた。

「遮断シールドがレベル4に設定……？しかも扉がロックされて……あのISの仕業ですよ！？」

「そのようだ。これでは避難することも救援に向かうこともできないな」

「……え？」

織斑先生は平然と言っていた。

「それって一夏兄ちゃんは出れないってことですか……？」

「そうだ」

モニターを見ると一夏兄ちゃんと凰さんは謎のISの攻撃を辛うじて回避している。

ビームの攻撃はしてないけど普通の攻撃でさえ回避するのが大変みたいだ。

もう一度あのビームを一夏兄ちゃんと凰さんが受けたら：

——死んじゃう？

血がいっぱい出て冷たくなって痛くなって怖くて寂しくなって

閉じ込められて思いっきり叫んで結局誰も来なくて

一夏兄ちゃんが死んじゃう？

何で？

どうして一夏兄ちゃんが死なないといけないの？

あのISはどうして一夏兄ちゃんを襲うの？

助けなきゃ

でも…ボクも死んじゃう——

どうしたらいいの…？

ボクはまだ生きていたい、死にたくない…

でも、一夏兄ちゃんも生きてほしい、それなら——！

ボクは電童を展開し、ユニコーンドリルを使って地面に潜った。



突然翔は電童を展開し、右腕のドリルを使い地面に潜った。

「待て！天野！」

織斑先生は翔を止めようとしたが、既に地面に潜っていた後だった。

「な…翔くん！？」

「いきなりどうしたの！？翔くん！」

あの漫才コンビ早苗と織香も翔の行動は予想外みたいだ。
突然ISを展開して地面を掘って…どうしようと思ったんだ？

「どうした、翔！」

私はISを部分展開し、翔に個人間秘密通信《プライベートチャネル》で連絡を取った。

だが反応は無い、普通ならすぐに返事をしてくれるというのに……
一体何が翔を動かしたんだ？まさか……

「織斑先生、地中にシールドは張られているんですか？」

「張られてはいないが……まさか」

「天野さんは地中からアリーナ内へ行こうとしているんですの！？」

「……多分、そうだと思うね。突然ISを展開したり、何も言わなかったり、

護の連絡にも通じなかったのは変だけれど…翔くんはアリーナ内へ行ってると思う」

しかし、普段は臆病な普通の少年が、友が危険になると自分の身を危険を冒してまで戦う。

見直したぞ、翔。

「……………」

…？篠ノ之が何も言わずに黙ってここから出て行った。

彼女の性格を考えると専用機を持っているのならば、先生の意見に逆らい織斑を助けようとするだろう。だが彼女には専用機を所有していない。嫌な予感がする、私は彼女の後をこっそりと追う。もし、もしも私が彼女の立場ならば、私は――



「くっ……！」

一夏は敵ISに向かい切りかかるも四回とも全ての攻撃が回避される。

敵にぶつかれば一撃必殺なのだが、いかに強力な攻撃でも当たらなければ意味はない。

「一夏っ、馬鹿！ちゃんと狙いなさいよ！」

「狙ってるっつーの！」

一夏は鈴に悪態をつきながら、何故敵ISが攻撃を回避しているのかを疑問に感じていた。

人間なら回避することが出来ないスピードと角度で攻撃しているが、

敵はそれを四度も回避している上に身体全身に付けたスラスターの出力は凄まじく、

一夏の瞬時加速を確認した後に移動して回避出来るほどだ。

敵ISは一夏と鈴を注目するのをやめたと思うと、ピットに向けてビームを貯め始めた。

(なっ……!?)

ピットには一夏の守りたい人達がいる場所だ。

シールドを貫通する攻撃を受ければただでは済まないだろう。

(間に合え———!)

一夏は敵ISに突っ込むが、距離が遠く握った刃は敵には届かない。敵はすでにビームを放とうとした瞬間———

「一夏兄ちゃあああん!!」

敵ISの地面からユニコーンドリルを装備した翔が現れた。

ドリルの先端は敵にぶつかり、体が倒れビームは空中へと飛んでいった。

「一夏兄ちゃん、大丈夫?」

地面から出てくるなり、いきなり翔は一夏に対して無事かどうかを聞いた。

しかし翔は涙目で声も震えており、逆に一夏に心配された。

「俺は大丈夫だけど…翔は大丈夫なのか?」

「つてかあんた、どっから来たのよ…」

鈴は呆れるような口調で翔に言った。

その三人の会話を聞き入るように敵の I S は目の部分と思われるレ
ンズをこちらに向けた。

I S がこっちを見ているのに気づいた翔はそれを見て体が震えてい
た。

「翔…もしかして怖いのか？」

一夏は今の翔を気遣う。

「うん、凄く怖いよ…戦いたくない、今すぐ逃げ出したいよ…」

震えて涙目になりながら翔は答える。

「だったらピットに戻りなさいよ、私たち二人で倒して見せるから」

鈴は翔にピットに戻るように言う、けれども翔は強い意志で鈴と一
夏に言葉を返す。

「でもっ、でも！一夏兄ちゃんが死んじゃうほうがもっと嫌だから
っ！」

その時、電童から黄色い光が放たれる。

翔はそれが何かは分かっていた、電童が全てを教えてくれた。

「な…何、この光は…」

「これは、データウエポンか！」

鈴は初めて見る不思議な光景を見てそれに驚き、その光の存在をしっている一夏は翔の新たな力の存在に興奮していた。

「ファイルセーブ！レオサークル！！」

そして黄色い光は右足に移動し、黄色い光が一瞬光ったと思うと、右足にはライオンを模した形をし、『勇氣』を象徴したデータウェポン、

『レオサークル』が装備されていた。

「一夏兄ちゃん、このISって……」

「もしかして、翔も気付いた……？」

一夏と翔は敵ISの違和感に気付きつつあった。

会話している時は襲わないし、何より行動が機械じみていた。

その敵ISの正体を暴いたのはハイパースキャンと呼ばれるレオサークルの特殊能力だった。

能力は全てを解析し、敵の正体だけでなく、隠れている敵をも発見する事ができる。

「一夏兄ちゃん、凰さん！敵ISデータを送ります！」

一夏と鈴のモニターには敵ISが解析されたデータが表示される。そこにはハッキリと『無人機』と表示されていた。

「嘘、無人機だなんてありえない……ISは人が乗って初めて動くものなの」

「でも実際目の前にいるだろ？無人なら全力で攻撃しても大丈夫だしな」

雪片式型の攻撃力は電童のファイナルアタックと違い、威力が高すぎる。

その為に普段はパワーをセーブして使用しているが、無人機ならセーブする必要も無い。

一夏は鈴と翔に敵を確実に仕留めるように作戦を練ったが、途中で予想外の出来事が起きる。

「一夏あっ！」

中継室にあるマイクから送られるスピーカーから箒の声が鳴り響いた。

「な、なにしてんだ、お前……」

中継室を見ると審判とナレーターと思われる人物がのびていた。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてどうする！」

箒は大声で一夏に訴える。その態度は怒り、焦っているような態度であった。

その後に護が中継室に入り込み、箒の使っていたマイクをひったくる様に奪い、

アリーナ内で戦っている一夏に向けていった。

「織斑！篠ノ之は今私が護る、だからお前は敵を倒すことに専念しろ！！」

その言葉を聞き、一夏はすぐに行動に移った。

「鈴、やれ！」

「わ、わかったわよ！」

一夏は鈴の目の前に移動し、衝撃砲の背に受け、瞬時加速を使って敵に向けて加速した。

「——オオオッ！！」

右手に握った雪片式型は主に力を貸すように強く光を放った。

白式の単一使用能力『零落白夜』にエネルギーをほとんど使い切る。その必殺の一撃は敵ISの右腕を切り落とした。

しかしその攻撃は決定打にならず、敵ISは残った左手の打撃を受ける。

左手で一夏は押さえつけられたまま、その目からビームを放つつもりでいるらしい。

「一夏っ！」

心配そうな箒の声が響く、しかし肝心の一夏は冷静なままだった。

「いけるな？翔」

「大丈夫っ！！」

空中から自信に満ちた翔の声、敵が空中を見た時には全ては遅かった。

一夏の時と同じで鈴の衝撃砲と瞬時加速を使い、空中から高速で敵 I S に標準を定める。

「レオサークル！」

翔は右足に装備されたレオサークルを高速に回転させ、倒すべき敵に向かって急降下した。

「ファイナルアタアアック！！」

敵 I S に蹴りを当て、高速回転された刃により外部の装甲から内部に入り、

右足の蹴りは敵 I S の胴体を貫通させ、内部に積まれていた部品を撒き散らした。

そして敵 I S は爆発し、一夏たちに敵意を示していた存在はアリーナから消滅した。



ふと気がつくと目の前に部屋の天井がある。

目を覚ますと左右から早苗お姉ちゃんと織香お姉さんがボクの顔を除いていた。

「目が覚めたんだね、翔くん。それにしても今日は大活躍だったね」

「あれ？ボク、どうなったんだっけ……」

「敵を倒した瞬間に翔くんが倒れちゃって、保健室に運ばれてたのよ」

あの時は：レオサークルのファイナルアタックを使い、無人機のI Sを完全に壊したんだった。

「一夏兄ちゃんは大丈夫なの……？」

「織斑は先ほど目が覚めたと織斑先生から聞いている」

ボクの顔を覗いている二人とは別に声が聞こえる。

護さんは片手で早苗お姉ちゃんの頭をどかせ、無理矢理ボクの顔を覗いてきた。

「ココアを作っておいた、とりあえず飲め」

護さんはボクにココアを入れたコップを渡す。

飲もうとしたけれども、思っていた以上に熱くってちょっと驚いた。それからココアに息で冷ますように飲んでみると、早苗お姉ちゃんと織香お姉さんが

口元から鼻辺りを手で押さえていた、何かあったのかな？

「そういえば翔。織斑先生がこれを書いておけたと」

と、護さんが持っていたのは……反省文だった。

「勝手に地面を掘り進みアリーナ内部へ入った罰だ……との事だ」

「ふええ……」

反省文、体が勝手に動いてISを展開して危険地帯に行ったとはいえ……
かなり字数の多い反省文はボクにとって絶望でしかなかった。



IS学園の地下50メートルにはレベル4権限を持つ関係者しか入る事ができない、
極秘裏に様々なことをできる空間がそこにあり、千冬と麻耶はそこにいた。

「ダメです……粉々になっていて解析できません……」

「ISのコアもか？」

「はい……全て粉々です」

麻耶は千冬の怒っているような雰囲気には怯えながらも、千冬の補佐をしていた。

千冬は再び無人機が戦闘をしていた映像に目を移す。

世界中のどこも開発が成功していないISの遠隔操作と独立稼働のシステム。

千冬はこのシステムを開発する事ができる人物を一人だけ知っていた。

「まさか、な……」



夕食を食べ終え、ボク達は四人で64のゲームをやっていた。
どうして64なのか、しかも初代のマリパなのかはよくわからないけど…

「よっしゃー！護さんのスターは頂いたー！」

「そうか、次にミニゲームで敵対したときは覚えておいくがいい」

護さんはマリパどころかゲーム自体が初めてなのにやたら上手い。そんな護さんが使っているキャラはDK、唯一知っているかららしい。

「おお……大砲でスターのマスのおすぐ前に飛んだ……」

「でもコイン無いんでしょう？」

「さっきミニゲームで早苗に妨害されてなければねえ……」

さっきから早苗お姉ちゃんが強すぎて敵わない。

こんな風にスターを入手しようにもミニゲームはほとんど早苗お姉ちゃんが勝ってしまう。

ボク達のコイン入手経路は青いマスか一人ミニゲームだけだ。

「こりゃあ今回も私の圧勝ですかぁ……？」

ワザとらしく早苗お姉ちゃんはボク達に挑発してくる。

実際孤児院でもサバゲだろうが対戦するゲームだろうが事があるごとに勝ってた気がする。

「翔くんと出雲さん、いますかー？」

玄関から山田先生の声が聞こえるが、ミニゲームが開始する直前の画面に映り、ボク達は移動するに移動できない状態だった。

「このミニゲームで負けたら出るってのはどうかな？」

「それはいいアイデアだな、よし、それでいこう」

「オイこら待てよお前らこれ3対1のミニゲームだし、私がフルボッコにされる大魔王の役割の虐めミニゲームじゃねえかよ

それにどうやって勝敗つけるんだよ三人で先生を出迎えるつもりかよ」

「早苗が行けって言うてるのよ、言わせないでよ恥ずかしい」

「今酷い虐めを垣間見た」

「いるんですかー？入りますよー」

山田先生も山田先生で勝手にマスターキーを使って部屋に入らないでください。

「山田先生、どうしたんですか？」

「はい。お引越しです」

「私が？」

「いえ、出雲さんがですよ」

早苗お姉ちゃんはもうどうしたらそんなリアクションがとれるんだろう。まあ、今のは素で天然な発言だったかもしれないけれど。

「そう、ですか……」

護さんは少しだけ悲しそうな表情をしていた。

この部屋に愛着でもあるのかな？そしたらボクが引越しても……

「あれ？山田先生、ボクは一夏兄ちゃんと同じ部屋じゃないんですか？」

「あ、はい。それは今後に……」

「引越しかあ、じゃあ私たちも手伝うとしましょうかっ」

と、織香お姉さんは言い、64の電源を消した。

「あーっ！私の勝っていたプレイヤーデータが……」

「どっちにしろ完全クリアしてたんだし、別にいいでしょ？」

「我が黄色の貴公子は戦場に散った……じゃあ、護さんの引越しを手伝うとしますか」

「切り替えが早いね。早苗のそういう所が私は好きよ（弄りやすくて）」

「そっかー、私も織香のそういう所が好きだぞー（弄りやすくて）」

何だか二人が思っていることが重なっているように見える。

一夏兄ちゃんにも言えることだけど、心が悟られやすいのかな？

「…手伝うなら手伝ってほしいのだが……」

護さんは漫才をして引越しの手伝いをしない二人に困っていた。

一方山田先生は篠ノ之さんの引越しの手伝いをするといって去っていった。

もしかすると護さんの新しい同居人って、もしかして……

「……………」

昨日まで隣のベッドで護さんが寝ていたのに、今は誰もいない。

そのせいか部屋は二人でいたときより広く感じていた。

でも、逆に広すぎて一人で寝ているのが寂しい……

布団に横になって寝ようとする、玄関からノックをする音が聞こえる。

「誰だろ……?」

ボクは起き上がり、玄関に向かって扉を開ける。

ドアをノックしていたのはさっきまで部屋にいた護さんだった。

「翔、最後に…この部屋で寝てもいいか?」

「うん。いいよ」

部屋が広くて心細かったけど、護さんが居てくれると安心する…

ずっと一緒に部屋でいたからかな?

そうだ、今度から一人で起きなきゃいけないんだ、大丈夫かなあ…

「…ずっと翔には言っておきたかったが、同居人だと言い難くてな…」

ボクと護さんはベッドに移動して、それぞれのベッドの上に座った。

「私は翔に姉と呼ぶと言っただろう？」

……実は私には弟がいたんだ、生きていればお前くらいの年のな
…」

「え……？」

今、初めて知った護さんの過去、護さんは過去のことを決して言わ
なかった。

けれども護さんの口から初めて聞いて、ボクはショックを受けた。
……だって家族と死別するっていうのは、想像している以上に辛い
ものだを知ってるから。

「だから、辛かったんだ…翔に姉と慕われると、どうしても弟の存
在を思い出してな……」

「ご、ごめんなさい……」

思わずボクは護さんに謝る、けれども護さんは気にするな、と普段
とは違う態度で接した。

「聞かせてくれ、オルコットは凰に対してはどうして姉と呼ばなか
った？」

…どうして私に対して姉と言ってくれるんだ？」

「えっと、それは……護さんはお姉さんみたいな気がして……」

ボクは本当の事を護さんに打ち明けた、すると護さんはボクを勢い
よく抱きしめる。

「え……？」

「……………」

護さんは何も言わなかったけれども、目から涙を流していた。
ボクはこのまま護さんが落ち着くまで抱かれていた。

「…すまないな、さっきから私のワガママばかり……」

「えっと、気にしないで。ボクも訓練とかさせてもらってるから…
…」

「ふふっ、そうか。じゃあこれで貸し借りは無しだな」

護さんは悪戯をした子供のような笑顔でいった。

いっつも表情を変えない護さんがここまで笑顔なのは初めて見た。
今ボクは護さんに抱きしめられて凄く懐かしくて、温かい気持ちになれた。

もっと、ボクの事を抱きしめてほしいって思う。

「その、だな…翔。今度私が学年別個人トーナメントで優勝したら
………」

ボクをぎゅっと抱きしめながら護さんは言い続ける。

「もし私が優勝したら姉と呼んでくれないだろうか？」

第十三話 二人の転校生

「翔くーん、おはよー」

「おはよー」

今日もいつもどおりにクラスのお姉さん達を挨拶をする。

「ねえねえ、天野くん、噂って本当？」

「あっ、バカ！」

ボクに話しかけてきたお姉さんを別のお姉さんが口を塞いだ。
何か嫌な…学校の七不思議みたいな噂かな？

「噂って…何のですか？」

ボクは噂の正体を知りたくてお姉さん達に聞いてみる。
しかしボクが考えていた怖い噂よりも平凡な話だった。

「あ…えっと、今日このクラスに転校生がくるみたいなのよ、ホラ」

と、お姉さんは噂を言ってきたお姉さんの口を塞ぎつつ、新たに増えた机を指差す。

…でも、なんで机が二つあるの？ 転校生は双子とかかなあ？

「諸君、おはよう」

「おはようございます！」

織斑先生が教室に入ったとたん、クラス全員がピシッと挨拶をした。ボクもその反応につられて同じ風に挨拶をする。

だけでもピシッとはせずにのんびりとマイペースで挨拶してる人が一人。

それは早苗お姉ちゃん：ではなく織香お姉さんである。

織香お姉さんは妹譲りなのか早苗お姉ちゃんとは別の意味でマイペースだ。

あの威圧感から自分のペースを出せるのは凄いと思う。

「さて、山田先生ホームルームを」

「は、はいっ」

「ええとですね、今日は二人の転校生を紹介します!」

「え……」

「「「えええええっ!?!」」」

机が二つ置かれてあっても、実際に先生に言われると驚く。

「失礼します」

「……………」

やはり教室のドアを開けて見えたのは二人、その姿を見て教室は静かになる。

だって、その内の一人は……男の人だったから。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。

この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしく
お願いします」

転校生のお兄ちゃんにはこやかに挨拶をする。

まさか男の人が転校してくると思えず、クラス全員がぽかんとし
ていた。

「お、男……？」

早苗お姉ちゃんが転校生に対して疑問をぶつけた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を
――」

「きゃ……」

「はい？」

「きゃあああああつ！！」

男の子とわかった皆が黄色い声をあげる。

高い女の人の歓喜の声はすぐ頭に響く。うるさい。

「男子！三人目の男子！」

「しかもウチのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「織斑くんと天野くんを足して2で割った感じ！」

織斑先生の存在を忘れてはしゃぐお姉さん達。

男の子が少ないのはわかるけど、転入したらしたでこんなにはしゃがなくても……

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

織斑先生は面倒くさそうにぼやく。

強くいつても黙ることはないと思っているのかな？

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんからー！」

もう一人の転校生、シャルルお兄さんの隣で腕を組んでいる凰さんより小さい人。

目に黒い眼帯をし、なんだが雰囲気が軍人のように見える。

シャルルお兄さんが太陽なら、もう一人は月のように対照的に感じる。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

教官？ 織斑先生の弟子だったのかな？

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、

ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

と、白い転校生ラウラさんはビシッと敬礼をする。

ここでは間違いなく、このラウラさんは軍人なのだと確信する。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

それから何も喋らない、これで終わり？

「あの、以上ですか？」

「以上だ」

山田先生は笑顔でラウラさんに訊くが、質問は無いと無慈悲に即答される。

ラウラさんはクラス全体を眺め、一夏兄ちゃんを見ると――

「！ 貴様が――」

その瞬間、バシッと転校生ラウラさんが一夏兄ちゃんの頬を叩く。

「……………」

「う？」

「私は認めない。貴様があの人の弟であると、認めるものか」

クラス全員が一夏兄ちゃんとラウラさんを注目する。

さっきまで男の人が転入して騒いできたのに、この静まりようである。

まあ、初対面なのにいきなり殴るとか誰もが黙るしかないんだけれどもね。

「いきなりなにしゃがる！」

「ふん……」

一夏兄ちゃんはラウラさんに怒るけど、それを無視してラウラさんは席に座った。

「あー…ゴホンゴホン！ではHRを終える。

各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。

今日は二組と合同でIS模擬戦を行う。解散！」

ぱんぱんつと織斑先生は手を叩いて皆に素早く行動させるようにする。

「おい織斑、天野。デュノアの面倒を見てやれ、同じ男子だろう。」

織斑先生に言われなくても、ボクはシャルル兄さんと一緒に更衣室まで移動しようとした。

まさか、一夏兄ちゃんは忘れていないよね？

「君達が織斑くん到天野くん？初めまして、ボクは――」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから」

ボク達はシャルルお兄さんの手を引いて教室へ出る。

「男子はアリーナ内の空いてる更衣室で着替えるの」

ボクはシャルルお兄さんに男子が着替える場所を説明する。

それにしても、シャルルさんの手を握ると違和感を感じる。

「う、うん……」

シャルルさんはまだ学園になれていないのか、そわそわしている。それに女の子ばかりだから妙に落ち着いていない。ちよっとシャルルさんに質問してみる。

「シャルルお兄さんの手、小さいね」

「えっ！？そ、そうかな……」

なぜかシャルルお兄さんは手が小さいと言われてビックリしていた。一夏兄ちゃんも触ってみて確かに……とつぶやいていた。

「さっきボクのことをお兄さんって呼んでたけど、何で？」

シャルルお兄さんは先ほどさらっといったボクの発言に疑問を持っているみたい。

もしかして、怒っちゃうかな……

「あっ……同じ男の子同士だし、お兄さんって呼んでも……ダメ？」

ボクはシャルルお兄さんに聞いてみる、けどシャルルお兄さんは手で口元を押さえた。

一夏兄ちゃん以外みんな口元を押さえたことがあったけど……何してるんだろう？

「う、うん。お兄さんって呼んでくれると嬉しいな。ありがとう、天野くん」

「あ…ええっと、翔って呼んでほしいな」

「そっか。よろしくね、翔くん」

「俺のことも、一夏って呼んでくれ」

「うん。よろしく、一夏」

ボク達は手を繋いでアリーナ内にある更衣室へと移動する。
けれども途中で噂の転校生を一目見に来たお姉さんに発見される。

「いたっ！こっちよ！」

「者ども、出会え出会えい！」

そこから地獄の鬼ごっこが始まった。

きゃあきゃあど騒ぐ女子がこっちに向かって走り出してくる。

「二人の黒髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね！」

「しかも瞳はエメラルド！」

「きゃあっ！見て見てっ！三人で手繋いでる！」

「あの禁断の関係で生まれた子……いいセンスだ！」

男の子と女の子が結婚しないと子供を運んでくるコウノトリは来ないって言ってたよ。

男の子同士でも子供ってできるのかな？キャベツから拾うのかな？

「うおおおっ、逃げるぞ二人とも！」

「えっ？う、うん。わかった」

一夏兄ちゃんはシャルルお兄さんの手を引っ張り更衣室へと案内した。

道中かなり武装した女の子が襲い掛かってくるが、なんとか逃げ切ったと伝えておく。

まさか早苗お姉ちゃんが混ざって狩りに使う貝殻の笛みたいな吹いてたのには驚いた：

っていうか、なんで混ざってるの？早苗お姉ちゃん……相変わらず自由だなあ。

「ふう、なんとか逃げ切ったか……」

「ここが更衣室だよ、シャルルお兄さん」

更衣室に入り、設置されている時計を確認する。

もう少しで授業が始まっちゃう：遅れるときと酷く怒られちゃう。

「うわ！時間ヤバいな！すぐに着替えちまおうぜ」

と一夏兄ちゃんは言い、バツと着ていたシャツを脱ぐ。

するとシャルルお兄さんは理由はわからないけどビックリした。

「わあっ!？」

「「?」」

「荷物でも忘れたのか？っていうか、早く着替えないと遅れるぞ？」

「う、うん。すぐに着替えるよ。でも、あっち向いてて、ね…？」

「ん？まあ別に着替えをジロジロ見る気はないが……」

「どうか、シャルルお兄さんは一夏兄ちゃんのこと見てるよね」

「み、見てないよ！別に見てないよ！」

なぜか慌てて否定するシャルルお兄さん。

リアクションがさつきから変な気がする、もっと変なの見てるから慣れてるけど。

シャルルお兄さんは顔を床に向ける、結局着替えないのかなあ？

ボクもシャツを脱いでISスーツを着るけど、なぜか視線を感じる。

「シャルル？」

「シャルルお兄さん？」

ボクと一夏兄ちゃんの声が重なる。

シャルルお兄さんは既にISスーツに着替えていた、早い。

「うわあ」

「シャルルって着替えるの超早いな。何かコツでもあるのか？」

「い、いや…特にないけど。二人とも、まだ着替えてないの？」

「ボクもはもうちょっと…」

ボクは下着を脱いで I S スーツを着る、その時なぜかシャルルお兄さんは顔を背けたけど。

みんなと違って毛が生えていないのを見るのは見苦しいのかな…？

「ボクはもう着替え終わったよ、二人とも」

「翔も早いな。もしかして遅れてるのって俺だけか？」

「うん。遅れてるのは一夏兄ちゃんだけだよ」

「二人とも、スーツ着るときに引っかからないのか？」

「ひ、引っかかるって？」

「一夏兄ちゃんだけだよ、そこが引っかかるの」

「そうか？」

「そうだよ」

一夏兄ちゃんはようやく I S スーツに着替える。

「よっ、と…よし、行こうぜ」

「う、うん」

シャルルお兄さんはまだ顔を真っ赤にしていた。

転校初日から風邪でも引いたのかな？それとも初めての事ばかりだからドキドキからかな？

ボク達は着替え終えて更衣室を出て、グラウンドへと向かう。

一夏兄ちゃんとシャルルお兄さんはISスーツの話題で盛り上がる。

「へえ！シャルルって社長の息子なのか。道理でなあ」

「うん？道理でって？」

「いや、なんつーか気品っていうか、いいところ育ちって感じがするじゃん？」

「いいところ、ね……」

シャルルお兄さんはなんだか落ち込んでいるように見えた。

一夏兄ちゃんとも目を離してしまう、理由は知らないけど話しちゃいけなかったみたい。

「翔くんも凄いよね。小学生でIS学園に入学するだなんて」

「う、うん……」

シャルルお兄さんは褒めたつもりみたいだけれども、できれば小学生だからって言って

凄いと言ってほしくない。勉強も追いついていないし、ISもまだきちんと使えない。

ボクの雰囲気を感じてか、シャルルお兄さんは話題を一夏兄ちゃんに変えた。

「い、一夏も凄いよね！あの織斑千冬さんの弟だなんて」

「こやつめ、ハハハ！」

「？」

一夏兄ちゃんは唐突に変なことを言い出した。
というか三国志のことを言ってもシャルルお兄さんは知らないんじゃないかな？

「まああれだ、俺たちは地雷原の犠牲になったってことで」

「え？よくわからないけど……」

「…ゴホン。シャルル君、ここで問題です」

「なんでいきなり君付け…？」

「まあまあ、高速下での運動における物体Aが受ける抵抗力は？」

「えっと、物体Aの速度に二乗——」

「そういうことだ」

「どういうことだ？」

「「……………」」

正直、一夏兄ちゃんの言っている意味がちょっとよくわからない。
なんでここで物理の問題がでてくるの？

「ぷっ…あははっ！なにそれ。ふ、ふふっ。一夏っておかしいなあ」

なぜか唐突に噴出すシャルルお兄さん、誰か説明してください。

「同じ笑われるんなら『こやつめハハハ』で返してほしかったなあ」

「高い宮殿も結構ですが陛下もお年ですので昇ったまま昇天なさるぬように」

ボクはネタ元を言ってみる、引っかかるかな？

「こやつめ、ハハハ！」

「はははっ！」

一夏兄ちゃんも乗ってくれたし、シャルルお兄さんもそれに釣られて笑い出す。

「なんだか二人とも、兄弟みたいだね」

「そうかな？」

と言うか皆忘れていると思うけど、ボクは孤児院の出身だし、一緒に住んでいる皆が皆兄弟姉妹といった感じで暮らしていたから、ボク自身無意識の内に一夏兄ちゃんに兄弟らしく振舞っていたかもしれない。

そうこうしている中、ボク達はグラウンドについた。

すでに皆はISスーツに着替えている状態で並んでいた。

二組と合同と言っていたから護さんと凰さんの姿もある。

「遅い！」

たどり着いた瞬間に織斑先生から怒られる。

「くだらん事を考えてる暇があったらさっさと並べ！」

「ひ、ひゃい！」

織斑先生の怒った声に驚いて思わず声を出してしまう。

しかも舌を噛んでしまった……すごい恥ずかしい。

皆口辺りを手で押さえている、もしかして見苦しいのかなあ……

黙って場所に並ぶ、皆が肌を出しているから、視線に困る……

オルコットさんと凰さんが一夏兄ちゃんのこと話していると――

「――安心しろ、バカは私の目の前にも二人いる」

オルコットさんと凰さんが後ろを向くと、そこには武器（黒いの）を構える織斑先生。

二人の頭は残念ながら先生の持っている黒いので叩かれるのであった。

その音は広いグラウンド上に響き、青い空の中に消えていった。

（早苗お姉ちゃんが話さないのって、これが理由なんだね……）

不思議と早苗お姉ちゃんが黙っているのには疑問を感じたが、流石に織斑先生の前でバカな真似はできないみたいな様子だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7704x/>

六つの聖獣を司るISを偶然使ってしまった僕

2012年1月13日18時58分発行